長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　81

国道153号　伊那・松島バイパス
埋蔵文化財発掘調査報告書2

—南箕輪村内—

箕輪（みのわ）遺跡

2007. 2

長野県伊那建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　81

国道153号　伊那・松島バイパス
埋蔵文化財発掘調査報告書2

—南箕輪村内—

箕輪（みのわ）遺跡

2007．2

長野県伊那建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

箕輪遺跡全景

V④区水田跡（中世以降）

はじめに

本書は、国道153号　伊那・松島バイパス建設工事に伴い南箕輪村で実施された箕輪遺跡の発掘調査報告書です。報告書は発掘調査の成果を記録として保存し、広く一般に周知することを目的としています。

箕輪遺跡は南箕輪村から箕輪町にかけての天竜川右岸に広がり、総面積は80～100haともいわれる非常に大きな遺跡です。昭和27年以降、現在に至るまで、南箕輪村と箕輪町による発掘調査が積み重ねられ、水田跡を中心とした遺跡であることが判明してきました。

そうした中、遺跡を南北に縦断する形で、国道153号　伊那・松島バイパス建設の計画が持ち上がり、箕輪町部分については平成12～15年にかけて当センターで発掘調査を実施しました。この調査により弥生時代中期と後期、古墳時代後期の集落が発見され、人々が定住した場所が明らかになりました。

続く平成17・18年度には南箕輪村分の調査が行われ、本書において成果を報告することができました。

今回の調査では中世以降の水田跡と、近世以降を中心とした溝跡が発見されました。特に水田跡は平成13年に箕輪町で調査した部分と連続することが確認でき、箕輪遺跡南部における生産域の広がりを明らかにすることができました。

調査成果の詳細は本書をご覧いただければと思いますが、先人たちが自然地形を利用しながら水田を耕作する様子が明らかになったのではないかと思います。

箕輪遺跡はまだ部分的な調査しか行われていませんが、今後も調査の成果を少しずつ蓄積することで、上伊那の先人たちによる開発の歴史が明らかになることと思います。

今回の発掘で得られた成果が、地域の歴史を解き明かすために永く活用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘作業から本報告書刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた長野県伊那建設事務所、南箕輪村と箕輪町の関係機関、地元の地権者や関係者の方がたに深甚なる謝意を申し上げます。

例　　言

1　発掘調査は、（財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター（以下県埋文センター）が長野県伊那建設事務所（以下伊那建設事務所）からの委託を受け、平成17年度および18年度に実施した。

2　本報告書は、伊那建設事務所による国道153号伊那・松島バイパス建設に先立ち、緊急発掘調査された上伊那郡南箕輪村に所在する箕輪遺跡の発掘調査報告書である。

3　本遺跡の調査成果は、箕輪町分については『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書71』が刊行されている。南箕輪村分については『長野県埋蔵文化財センター年報22』で一部紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。

4　本書で掲載した地図は、国土交通省国土地理院発行の地形図（1：50000)、南箕輪都市計画図（1：2500)、箕輪町基本図（1：2500）をもとに作成した。

5　測量基準点設置及び単点測量等の測量について次の機関に業務委託した。
平成17年度：日本空間情報技術株式会社
平成18年度：新日本航業株式会社

6　本書の執筆は、廣田和穂調査研究員が行い、市澤英利調査部長・上田典男調査第1課長が校閲した。

7　本調査にかかわる記録及び出土遺物は、報告書刊行後に南箕輪村教育委員会に移管する。

8　発掘調査・報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関のご指導・ご支援を得ている。
（敬称略、五十音順）
赤松　茂　唐木陽平　友松瑞豊　根橋トシ子　丸山敞一郎　南箕輪村教育委員会　箕輪町教育委員会

凡　　例

1　本書に掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。
遺構図については規模に応じて縮尺を変更し、個別にスケールを表示する。
遺物実測図については、土器実測図を1：4、石器実測図1：2と1：3とする。
遺物写真については、おおむね1：2を基本とする。

2　座標は箕輪町分の調査成果との整合性を考慮し、旧測地系で示してある。

3　土層の色帳は「新版　標準土色帖」による。

本 文 目 次

巻頭図版
はじめに
例　言・凡　例
目　次

第Ⅰ章　序説
第１節　調査に至る経過……1
第２節　調査および報告書刊行までの経過……3
第３節　発掘調査・整理作業の方法……4
第Ⅱ章　遺跡周辺の環境
第１節　遺跡周辺の環境……7
第２節　箕輪遺跡南部における調査……7
第Ⅲ章　調査の成果
第１節　基本層序と各地区の土層堆積状況……13
第２節　検出遺構と遺物……14
第Ⅳ章　まとめ

箕輪遺跡関連文献目録
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　箕輪遺跡の範囲と調査位置……2
第２図　南箕輪村における調査範囲……6
第３図　グリッドの設定……6
第４図　長野県埋蔵文化財センター調査区
　　における土層模式図……8
第５図　箕輪遺跡南部の調査地点……9
第６図　Ⅴ区全体図……11
第７図　Ⅴ区土層柱状図……11
第８図　Ⅴ③区２トレンチ土層断面図……11
第９図　Ⅴ区水田跡……15
第10図　501・502号溝……18
第11図　503号溝……20
第12図　Ⅴ③・⑥・⑦区出土遺物……22

挿表目次

第１表　箕輪遺跡南部の調査地点一覧……9

写真図版目次

PL1　箕輪遺跡　平成17・18年度調査範囲
PL2　Ⅴ③区遺構１
PL3　Ⅴ③区遺構２
PL4　Ⅴ③区遺構３
PL5　Ⅴ③区遺構４
PL6　Ⅴ⑥・⑦区遺構
PL7　南箕輪村に残る写真・絵図
PL8　Ⅴ③・⑥・⑦区遺物写真

第Ⅰ章　序説

第１節　調査に至る経過

１　発掘調査委託契約

箕輪遺跡は、上伊那郡箕輪町～同郡南箕輪村にかけての天竜川右岸に広がる、水田跡を中心とした遺跡である（第１図）。1952（昭和27）年に本格化した区画整理事業で、多くの農耕具や遺物が出土し、遺跡の存在が知られるようになった。1954（昭和29）年に箕輪遺跡と命名され、遺跡の発見届けが提出された。以後、箕輪町や南箕輪村による発掘調査が断続的に行われてきている（巻末文献目録参照）。

伊那建設事務所による国道153号伊那・松島バイパス建設が箕輪遺跡を南北に縦断する形で計画された。箕輪町分については、平成12～15年度にかけて県埋文センターが調査を行い、平成16年度に報告書を刊行した。続く南箕輪村分の保護措置については、平成16年１月に、伊那建設事務所、長野県教育委員会文化財・生涯学習課、県埋文センターの３者で協議し、同一の遺跡であり一連の事業であることから、記録作成目的の発掘調査を県埋文センターが実施することに決まった。

２　発掘届と発掘の指示

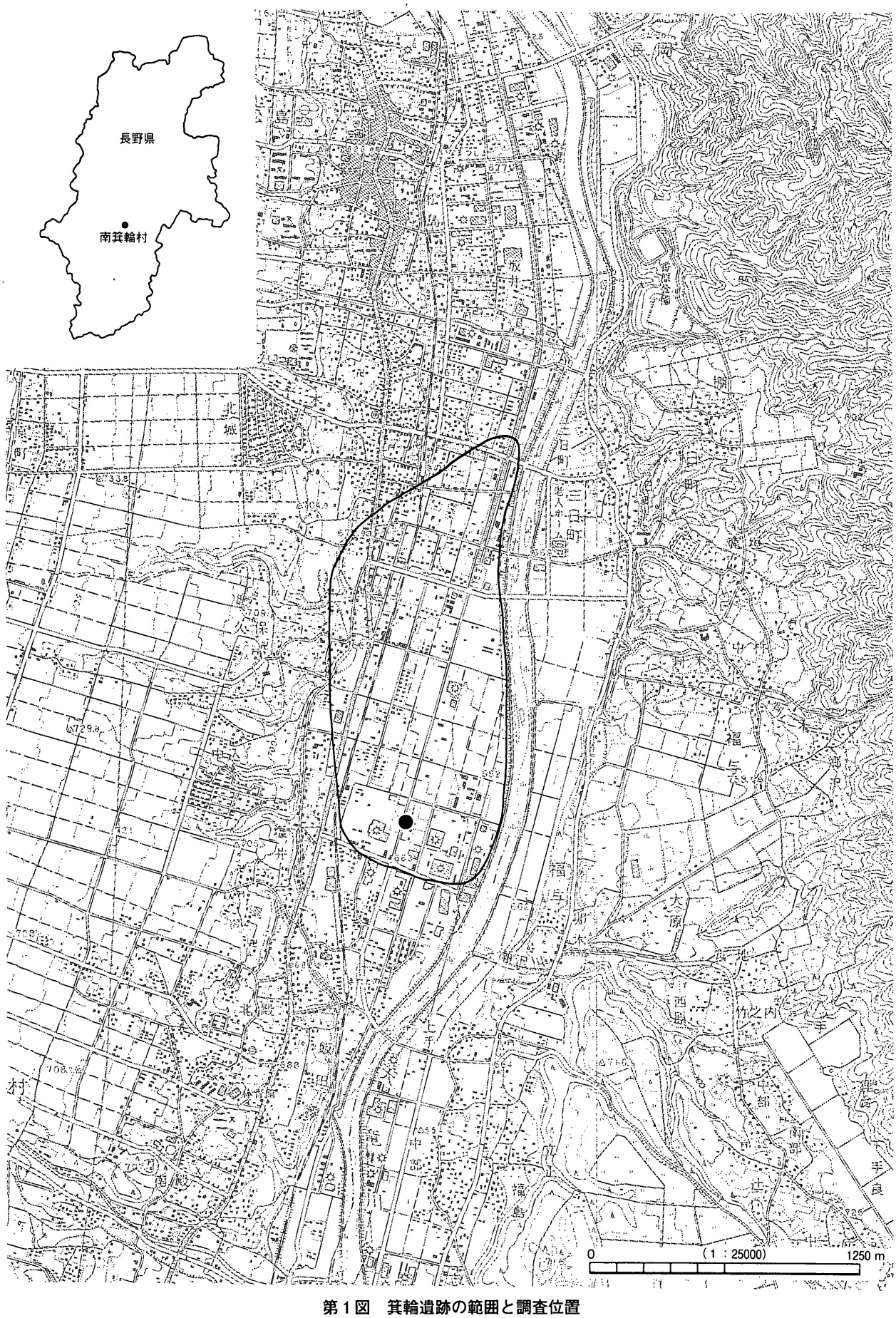
上記の協議を受けて、県埋文センターでは、平成17年４月１日付け17長埋第12-5号で県教育委員会あてに文化財保護法第92条に基づく発掘届を提出し、同年４月11日付け17教文第4-5号により県教育委員会教育長から発掘調査実施の通知を受けた。

平成18年度も、平成18年５月15日付け18長埋第1-1号で県教育委員会あてに発掘届を提出し、同年５月18日付18教文第4-13号により発掘調査実施の通知を受けた。

３　受委託契約

伊那建設事務所と長野県埋蔵文化財センターとの契約内容は下表のとおりである。

	平成17年度		平成18年度	
内　　容	発掘作業、基礎整理作業		発掘作業、本格整理作業、報告書刊行	
期　　間	H17.4.1～H18.3.24まで		H18.5.24～H19.3.9まで	
受 託 料	当初契約額	変更契約額	当初契約額	変更契約額※
	36222000円	20628000円	12794000円	7439000円



第１図　箕輪遺跡の範囲と調査位置

第２節　調査および報告書刊行までの経過

１　体制と経過

発掘作業の体制と期間、面積は次の通りである。

・　平成17年度

所　　長：仁科松男　副所長：根岸誠司　管理部長補佐：上原　貞

調査部長：市澤英利　調査第２課長：平林　彰　調査研究員：河西克造　廣田和穂

発掘期間：平成17年４月25日～７月８日

基礎整理期間：平成17年12月１日～平成18年３月24日

面積：4200㎡

Ｖ－③・④・⑤区の発掘調査と土器洗い・図面整理等の基礎整理作業を行う。

・　平成18年度

所　　長：仁科松男　副所長：根岸誠司　管理係長：山崎勇治

調査部長：市澤英利　調査第１課長：上田典男　調査研究員：廣田和穂

発掘期間：平成18年６月12日～６月23日

本格整理期間：平成18年５月～７月・11月

面積　2000㎡

Ｖ－⑥・⑦区の発掘調査と、遺物実測・遺構トレース・原稿執筆等の本格整理作業を行い、報告書を刊行した。

２　発掘調査および整理作業参加者

発掘補助員：新井勝人　相原恵美子　池上忠人　池上洋子　伊藤一雄　伊藤昌一　井上美幸
荻原文博　小島　実　倉田　保　小池温俊　佐々木則子　高林千尋　中村達郎
中山純恵　山浦和加子　山崎清美　山田幸弘

整理補助員：石田多美子　市川ちず子　臼田知子　荻原勝子　小林奈美江　近藤朋子
高橋康子　松林貴子

3　調査日誌（抄）

平成17年
4月26日　重機による表土剥ぎ開始。
4月27日　プレハブ等設置。
5月16日　17年度発掘開始式。
5月23日　501号溝を検出。
5月26日　南箕輪小学校３年生約40名現場見学。
6月９日　疑似畦畔を検出。
6月10日　箕輪町教育委員会現場視察。
6月13～17日　長野県伊那養護学校現場実習。
6月24日　Ⅴ④区調査開始。
7月８日　17年度発掘終了式。
12月１日　冬季基礎整理作業開始
平成18年
3月24日　冬季基礎整理作業終了
3月17日　Ⅴ④区未調査部分の工事立会い
6月12日　18年度発掘開始式
6月19日　Ⅴ⑦区調査開始
6月21日　南箕輪村教育委員会現場視察
6月23日　18年度発掘終了式
12月28日　報告書原稿入稿
平成19年
2月28日　報告書刊行

1　501号溝　調査風景

2　南箕輪小学校３年生の社会見学

3　伊那養護学校の現場実習

第３節　発掘調査・整理作業の方法

1　発掘調査の方法

（1）遺跡記号と遺構記号

遺跡名は、県教育委員会及び南箕輪村保有の遺跡台帳に記載されている「箕輪遺跡」とした。遺跡記号は、発掘調査及び整理作業の便宜上、大文字アルファベット３文字で「HMW」と表記している。１文字目は長野県内を９地区に分けた地区記号で上伊那郡が該当する「H」、２・３文字目は遺跡をローマ字表記した「MINOWA」から「MW」を用いた。この記号は県埋文センターが調査した南箕輪村と箕輪町分に関するすべての遺物・図面・写真で使用している。

遺構記号は、調査記録の便宜を図るため、遺跡で検出された遺構に平面形や分布の特徴を指標にして付けている。この記号は基本的に検出時に決定するため、必ずしも個々の遺構の性格を示すものではない。

箕輪遺跡（南箕輪村分）の諸記録・遺物の注記にはSD（溝跡）の記号を用いた。

（2）調査区の設定

箕輪遺跡の調査範囲は南北に長いため、調査区の北端を基点に大きな交差点ごとにⅠ～Ⅴ区に地区を分けており、南箕輪村分はⅤ区に該当する（Ⅵ区は松島バイパス）。またⅤ区は①～⑦区に分けられ、平成13年度に①・②区（第3図）、平成17年度に③～⑤区、平成18年度に⑥・⑦区を調査した（第2図）。

グリッドの設定は、箕輪町分の調査区で設定した基準線に準じており、調査区北西部にある旧国家座標数値X＝－11,600、Y＝－45,800ラインを基に200m四方の大々地区を設定した。また大々地区内を25区画（40×40m）に分割して大地区とし、さらに大地区を25区画（8×8m）に分割し中地区を設定した

箕輪遺跡は10の大々地区に分かれ、地区名にはローマ数字（Ⅰ～X）を用いた。このうち南箕輪村分は、Ⅸ・X地区に相当する。（第3図）。

（3）検出面の設定と各地区の調査法

県埋文センターでは、調査の統一性を図るために独自に「遺跡調査の方針と手順」を作成しており、それに基づいて調査を実施している。

まず表土剥ぎに先行して遺構の有無と遺物の出土層位を把握する目的で、重機により調査区全体に南北方向に連続したトレンチを掘削し、調査区全体の土層堆積状況を把握した。その結果、Ⅴ③区ではⅢ層面で遺構が検出されたため、重機でⅠ・Ⅱ層を剥ぎ、以後は人力による検出を行った。また同地区中央には溝跡に直行する形で東西方向にトレンチを設定し（2トレンチ）、調査時の土層把握や、地区全体の土層堆積状況の把握を行った。一方、Ⅴ④・⑤区はトレンチ調査を行うものの、遺構・遺物が確認されなかったことから土層断面図を記録し終了とした。Ⅴ⑥区はトレンチ調査を行い、特に南部は近接するⅤ⑤区との土層対比を行い、土層断面図を記録した。北部は平成13年度調査区から伸びる溝跡が検出されたため、重機で表土を剥ぎ、面的調査を行った。Ⅴ⑦区は、13年度の調査成果から水田跡が確認できる地点のみ面的調査を行った。しかし調査対象地の大部分は下水管が敷設されていたため、トレンチ調査を行い、隣接するⅤ③区との土層対比を行った。

（4）測量について

調査範囲、個別遺構の平面図および出土遺物の位置については、トータルステーションと電子野帳を使用した単点測量を行った。測量と作図は委託し、調査担当者が校正した。各遺構や調査区の土層断面図については、手取り測量で行った。

2　整理作業の方法

（1）遺構の整理

遺構図は、基礎整理時に記載内容や図面相互の点検、修正を行い、図面台帳・写真台帳を作成、所見のまとめを行った。本格整理時には委託図面と手描き図面の合成作業を行い、遺構単位にトレース図を作成、所見と合わせて編集業務を行った。

（2）遺物の整理

遺物は土器片を中心に少量出土しただけなので、発掘期間の雨天時に土器洗いと注記を実施した。注記は遺跡記号である「HMW」を先頭に、地区名、遺構名、取上NO等を記述した。整理段階では、遺構の時期決定に必要な資料と、残存状況の良い資料を抽出して図化した。遺物の写真撮影はデジタルカメラを用いて担当者が行った。

（3）整理収納

報告書刊行後は、資料を地元教育委員会に移管することを前提とし、県埋文センターの移管資料一覧に則って、図面記録類、写真記録類、遺物、台帳などの整理、収納を行った。

注　Tはトレンチの略

第２図　南箕輪村における調査範囲（１：1200）

第３図　グリッドの設定（１：8000）
（埋文センター 2005 より引用一部改）

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境

第１節　遺跡周辺の環境

箕輪遺跡は長野県の南部、上伊那郡の箕輪町から同郡南箕輪村にかけて所在する（図１）。遺跡は天竜川右岸に広がる沖積地上に形成されており、その範囲は遺跡北端の箕輪町JR飯田線木ノ下駅付近から南端の南箕輪村中田地籍付近まで最大で約2000m。東端の天竜川から、西端の国道153号付近まで最大で約700mに広がり、総面積は80～100haといわれている。標高は北端で668m程、南端で660m程を測り、北から南にかけて緩やかに傾斜する。地形については、平成12年度より行われた国道153号バイパス工事に伴う県埋文センターが実施した発掘調査で遺跡を南北方向に縦断して調査したため、遺跡の北部から南部までの地形の変化が以下の通り確認された（第４図参照）（市川2004・県埋文センター2005）。

①：狭い河道跡や沢が流れる微高地

②：小規模な微行地と埋没河道跡の浅いくぼ地が連続する低地部分

③：中央部の深い川跡の連続する低地部分

④：集落が見つかった微高地

⑤：埋没河道主体の低地

17・18年度調査した南箕輪遺跡付近は⑤に相当し、調査の結果、同様の堆積土層が確認され、従来の調査成果を補強するものとなった（第６・７図）。

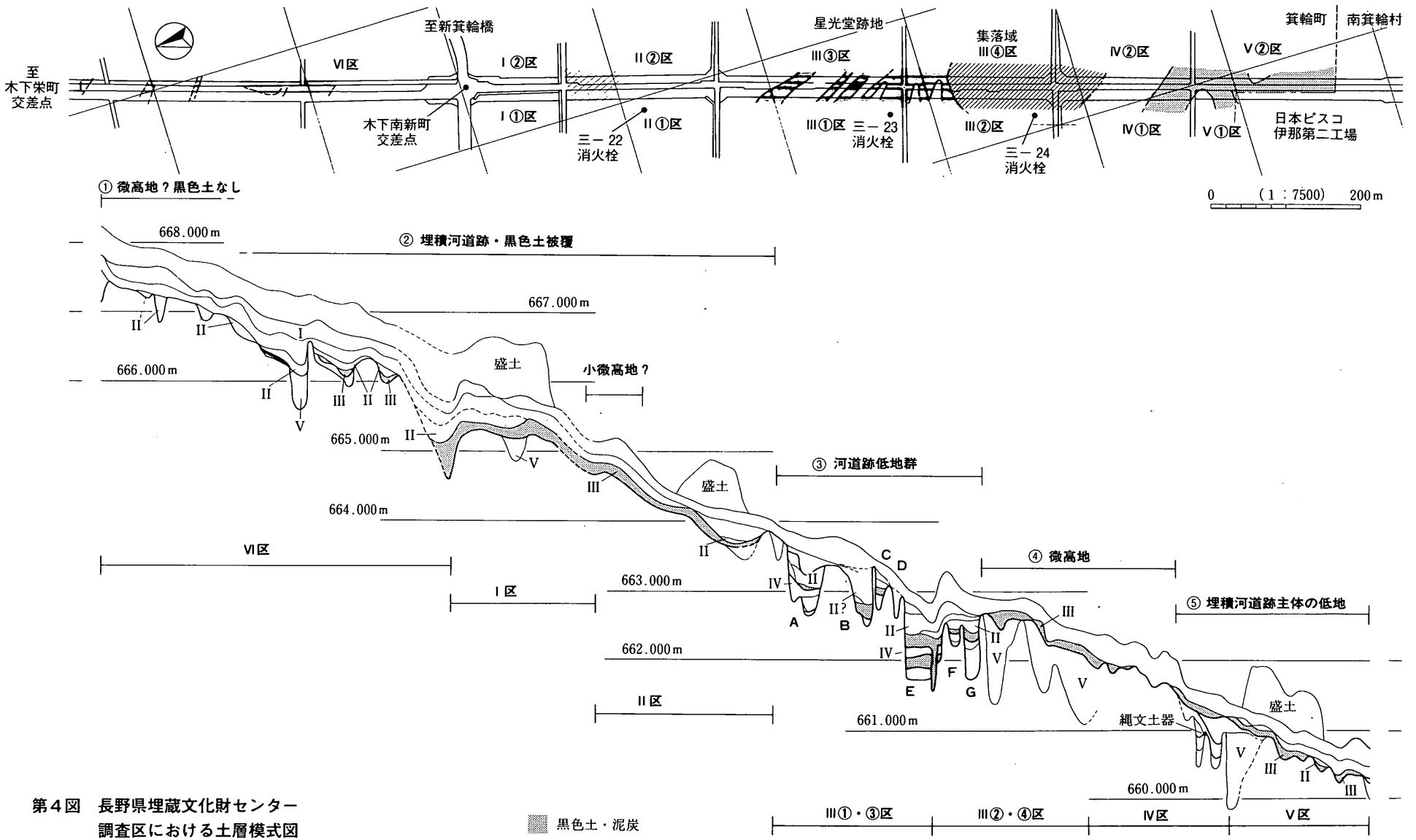
第２節　箕輪遺跡南部における調査

箕輪遺跡は昭和27年以降、断続的に調査されており、すでに多くの報告書・論文等が公表されているため（巻末参照）、本書では遺跡南部の調査事例を紹介し、遺跡の南限について触れたい（第５図・第１表）。

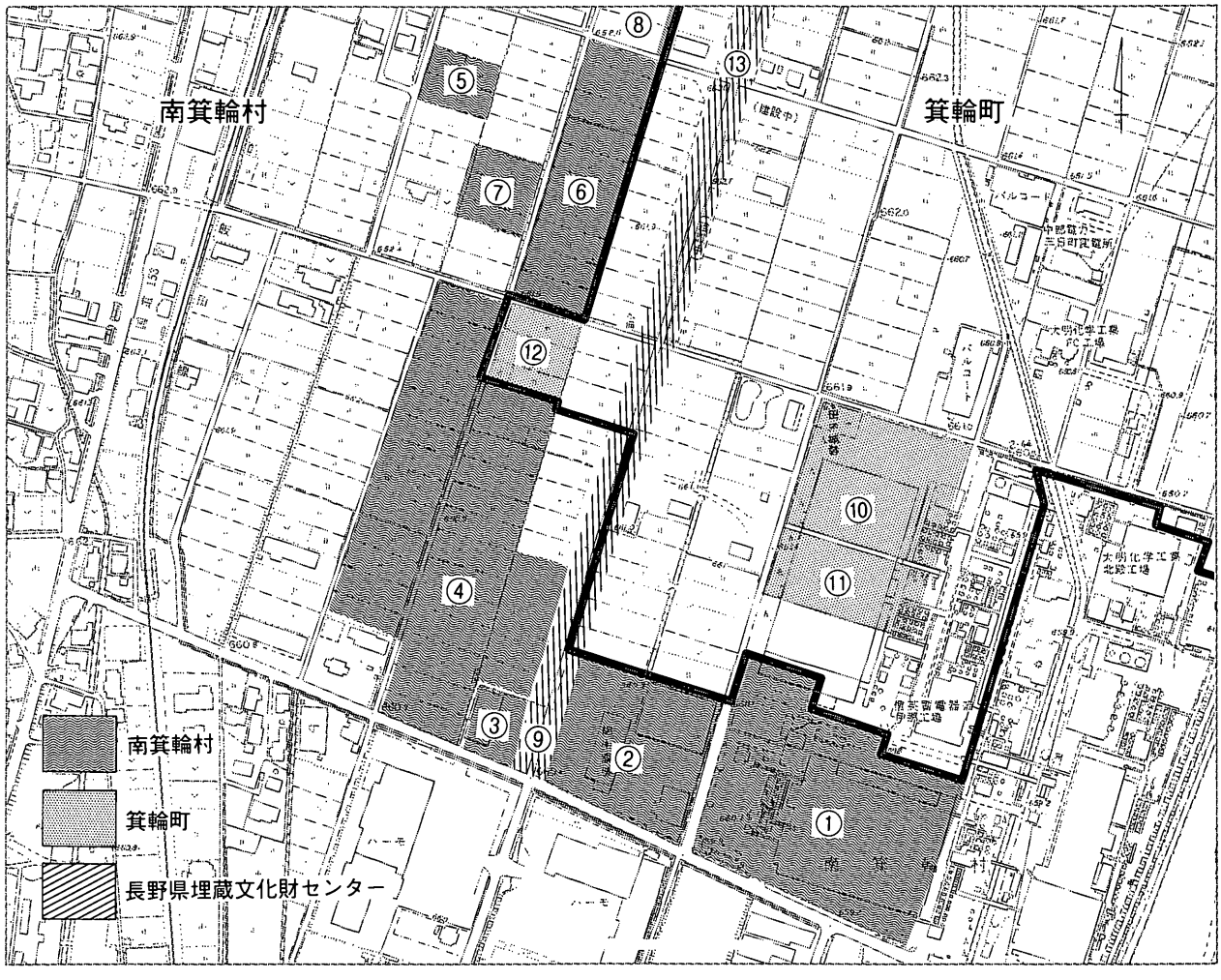
南箕輪村関連：中田地区④の調査では、水路状遺構が検出され、南北80mに渡り約5000本の杭が打ち込まれているのを検出した。この遺構は近接する箕輪町の調査地⑫でも確認されている。遺物は青磁片、天目茶碗、寛永通宝などが出土し、時期的に中世を遡ることはないと推測されている（南箕輪村教委1993）。一方、中田地区⑨の調査では中世以降の水田跡と、近世以降の溝跡を検出した（県埋文センター2007）。また天下方地区⑧で弥生時代土器片と住居跡を検出している。

箕輪町関連：三日町地区⑩・⑪の調査では、遺構・遺物とも検出されていないものの、⑬の調査では弥生生中期後半・弥生後期・古墳時代後期の集落跡を検出した（県埋文センター2005）。

以上・遺跡南部における調査状況を概観した。特に天下方地区⑧の住居跡については、近接する三日町区⑬で集落跡が調査されている点から、ムラの広がりを推測する上で注目される。しかし他の調査例では、中田地区④・三日町地区⑫で水路状遺構、中田地区⑨で古代末～中世の水田跡が検出された以外に明確な遺構は確認されていない。後世の削平により明らかにできない部分もあるが、検出遺構が少ない点と、調査区付近で河道状低地が多くなり、地形の変換点となる点から、南箕輪村と箕輪町との境（今年度調査区付近）が箕輪遺跡における遺跡の南限にあたる可能性が高いと判断される。



第４図　長野県埋蔵文化財センター調査区における土層模式図
（埋文センター2005より引用一部改）



第５図　箕輪遺跡南部の調査地点（１：5000）

番号	調査主体	地点	対象面積	検出遺構	出土遺物	調査状況	報告書
①	南箕輪村	河原田3990他	16000㎡			試掘	
②	南箕輪村	溝上3963-1他	9000㎡			試掘	
③	南箕輪村	中田3960地	1500㎡			試掘	
④	南箕輪村	中田845他	7000㎡	杭列遺構・水路・溝状遺構・暗渠・自然流路	土器・木製品・石器・陶器・鉄製品	本調査	南箕輪村教委1993
⑤	南箕輪村	天下方181-1他	2000㎡		土器陶器等若干	試掘	南箕輪村教委1994
⑥	南箕輪村	ナガレ135他	8440㎡		土器片少量・杭	試掘	
⑦	南箕輪村	ナガレ147他	2290㎡		木杭	試掘	
⑧	南箕輪村	天下方131他	133㎡	住居跡	弥生土器	立会い	
⑨	南箕輪村	中田3881-1他	6200㎡	水田跡古代末～中世・溝跡(近世以降)	土器・陶器・石器	本調査	本報告書
⑩	箕輪町	三日町990他	9000㎡			本調査	箕輪町教委1983
⑪	箕輪町	三日町989他	4500㎡			立会い	
⑫	箕輪町	三日町1020-1他	2500㎡	杭列遺構・水路・溝状遺構		立会い	
⑬	箕輪町	三日町	31700㎡	集落跡(弥生中期・後期・古墳後期・) 水田跡(古代・中近世)	土器・石器・木器・鉄器等	本調査	県埋文センター2005

第１表　箕輪遺跡南部の調査地点一覧

1　V⑥区南端調査風景

2　V⑥区トレンチ

3　V⑥区10トレンチ

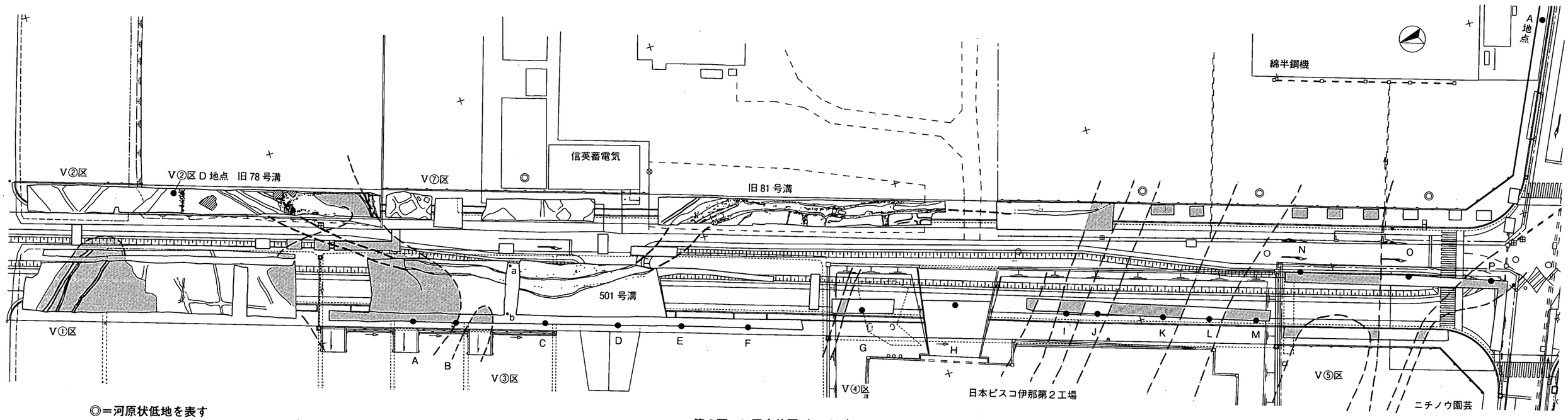
④　V⑦区13トレンチ

5　V⑥区501号溝杭出土状況

6　委託測量実施状況

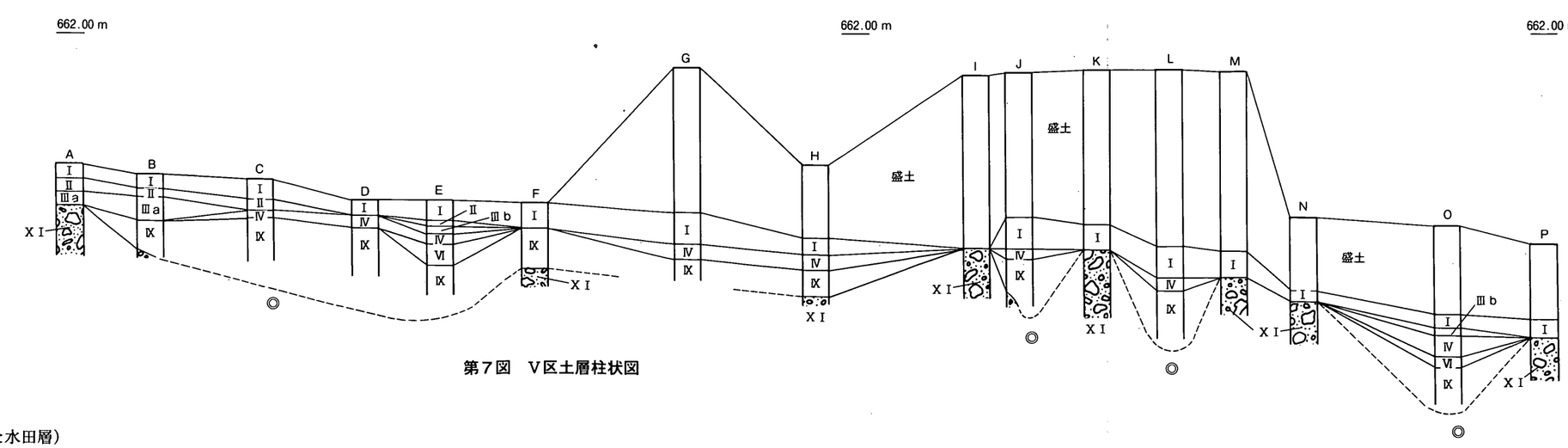
7　V⑦区作業風景

8　発掘調査参加者

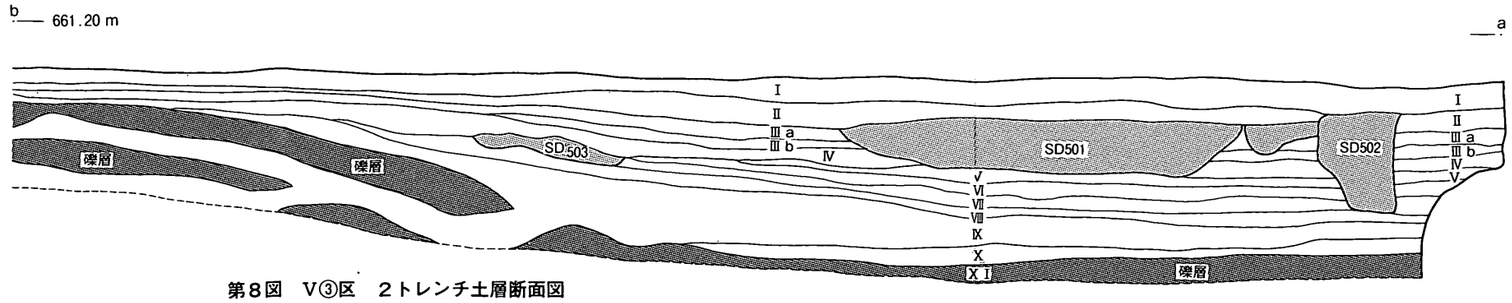


◎＝河原状低地を表す
スクリーントーンはXI層（砂礫層）の高まりを表す。

第6図　V区全体図（1：800）



第7図　V区土層柱状図



第8図　V③区　2トレンチ土層断面図

第7・8図土層注記

Ⅰ	：2.5Y3/1	黒褐色土　現耕土
Ⅱ	：10YR4/1	褐灰色土　旧耕土
Ⅲa	：10YR1.7/1	黒色粘土（黒色ピート層を母材とした水田層）
Ⅲb	：10YR1.7/1	黒色ピート（ヨシ・アシなどの植物質が良好に残り、薄く堆積）
Ⅳ	：10YR2/1	黒色粘土（Fe集積あり）
Ⅴ	：10YR4/1	褐灰色シルト質粘土層
Ⅵ	：10YR3/1	黒褐色シルト質粘土層
Ⅶ	：5Y4/1	灰色シルト質粘土層
Ⅷ	：10YR1.7/1	黒色シルト質粘土層
Ⅸ	：5Y4/1	灰色砂質シルト層
Ⅹ	：10YR2/2	黒褐色ピート層（植物質多く含む）
XI	：礫層（基盤）	

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　基本層序と各地区の土層堆積状況

１　基本土層

平成17・18年度の調査区は、南北約250m、幅は12mと細長い。一部土層の堆積状況が異なる部分もあるが、大方の状況は一致しており、平成12～15年度の調査区ともほぼ対応する（第６・７図）。

Ⅰ：2.5Y3/1　　黒褐色土　　現耕土
Ⅱ：10YR4/1　　褐灰色土　旧耕土
Ⅲａ：10YR1.7/1　黒色粘土層（黒色ピート層を母材とした水田層）
Ⅲｂ：10YR1.7/1　黒色ピート層（ヨシ・アシなどの植物質が良好に残り、薄く堆積）
Ⅳ：10YR2/1　　黒色粘土層（Fe集積あり）
Ⅴ：10YR4/1　　褐灰色シルト質粘土層
Ⅵ：10YR3/1　　黒褐色シルト質粘土層
Ⅶ：5Y4/1　　灰色シルト質粘土層
Ⅷ：10YR1.7/1　　黒色シルト質粘土層
Ⅸ：5Y4/1　　灰色砂質シルト層
Ⅹ：10YR2/2　　黒褐色ピート層（植物質多く含む）
ⅩⅠ：礫層（基盤）

２　各地区の概要

Ⅴ③区：南北方向に２本、東西方向に２本のトレンチを設定した（第６図）。その結果、調査区ほぼ中央部に、国道東側のⅤ②区（平成13年度調査）から続く河道状低地を検出した。本低地は調査区内で円形を呈し、長さは南北約80m規模、砂礫層（ⅩⅠ層）上面と河道状低地の底部との高低差は約1mを測る。

この河道状低地は、今回の調査区の中でも最も大規模なもので、砂礫層（ⅩⅠ層）堆積後に河川の浸食等で形成されたものと思われる。この低地には黒色化する粘土層・シルト層が複数堆積していた。特に２トレンチは地形的に若干低まる場所（凹み）で、粘土層とシルト層（Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ層）が確認された（第８図PL5下）。これらの堆積土層は④・⑤区においても部分的に確認されているため、③区だけに存在するのではなく、当初は調査区内ほぼ全域に堆積していたと考えられる。現耕作土やⅡ層（旧耕作土・水田層）の堆積による削平で、地形の凹み部分だけ残存したものと判断した。

本地区ではⅢａ層上面で501号溝と502号溝（10図）、続くⅢｂ層下面では水田跡、Ⅳ層下面では503号溝（11図）が検出された。

Ⅴ④区：南北方向に２箇所トレンチを設定した（第２図）。土層断面観察の結果、河道状低地が何本も連

続することが判明した（第６図）。しかし河道状低地部分は浅く、Ⅳ～Ⅸ層は部分的に堆積したに過ぎない。本地区では遺構は確認されていない。

Ⅴ⑤区：南北方向に２箇所、東西方向に１箇所トレンチを設定した（第２図）。土層断面観察の結果、調査区北側と南側の２箇所で河道状低地が確認され、灰色シルト層（Ⅸ層）が堆積していた。特に地区北部の河道状低地は、Ⅴ④区南端で見つかった砂礫層の続きと思われるもので、幅約30mを測る大規模なものである。ただし、調査区西端に設定した３トレンチでは河道状低地が３箇所確認されており、砂礫層堆積範囲内にも複雑に河道状低地が入り込む状態を示している（第６図）。

調査区中央部には、南東－北西方向にのびる河道状低地があり、ここにはⅢ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ層が確認でき、Ⅴ③区南北トレンチと同様な堆積状態を示すことが判明した。Ⅴ④区の土層堆積状況と合わせれば、水田跡と思われるⅢｂ層は少なくともⅤ③～⑤区まで広がっていたと判断できる。本地区では遺構は確認されていない。

Ⅴ⑥区：調査区全体に南北方向に断続的にトレンチを設定したところ（第６図）、Ⅴ⑤区とほぼ対応する河道状低地を検出し、南東－北西方向にのびる河道状低地が本調査区まで延びることが判明した。また北部ではトレンチ調査の結果、部分的に砂層の堆積と杭を確認し、501号溝の延長部分と判断、面的調査により溝跡を確認できた。

Ⅴ⑦区：本調査区においても南北方向に断続的にトレンチを設定した所（第６図）、Ⅴ⑥区同様に河道状低地の高まりがⅤ③・④区と部分的に対応し、南東－北西方向にのびる河道状低地の広がりを本地区においても確認した。一方、501号溝のプランも検出され、調査区内を大きく蛇行する流路の実態が一層明らかとなった。また平成13年に一部未調査だった部分について面的調査を行った。対象地の両側は水田跡が検出されており、今回の調査地でも耕土下でⅢ・Ⅳ層を確認するなど土層の対比が可能であり、僅かながら疑似畦畔を検出した。

第２節　検出遺構と遺物

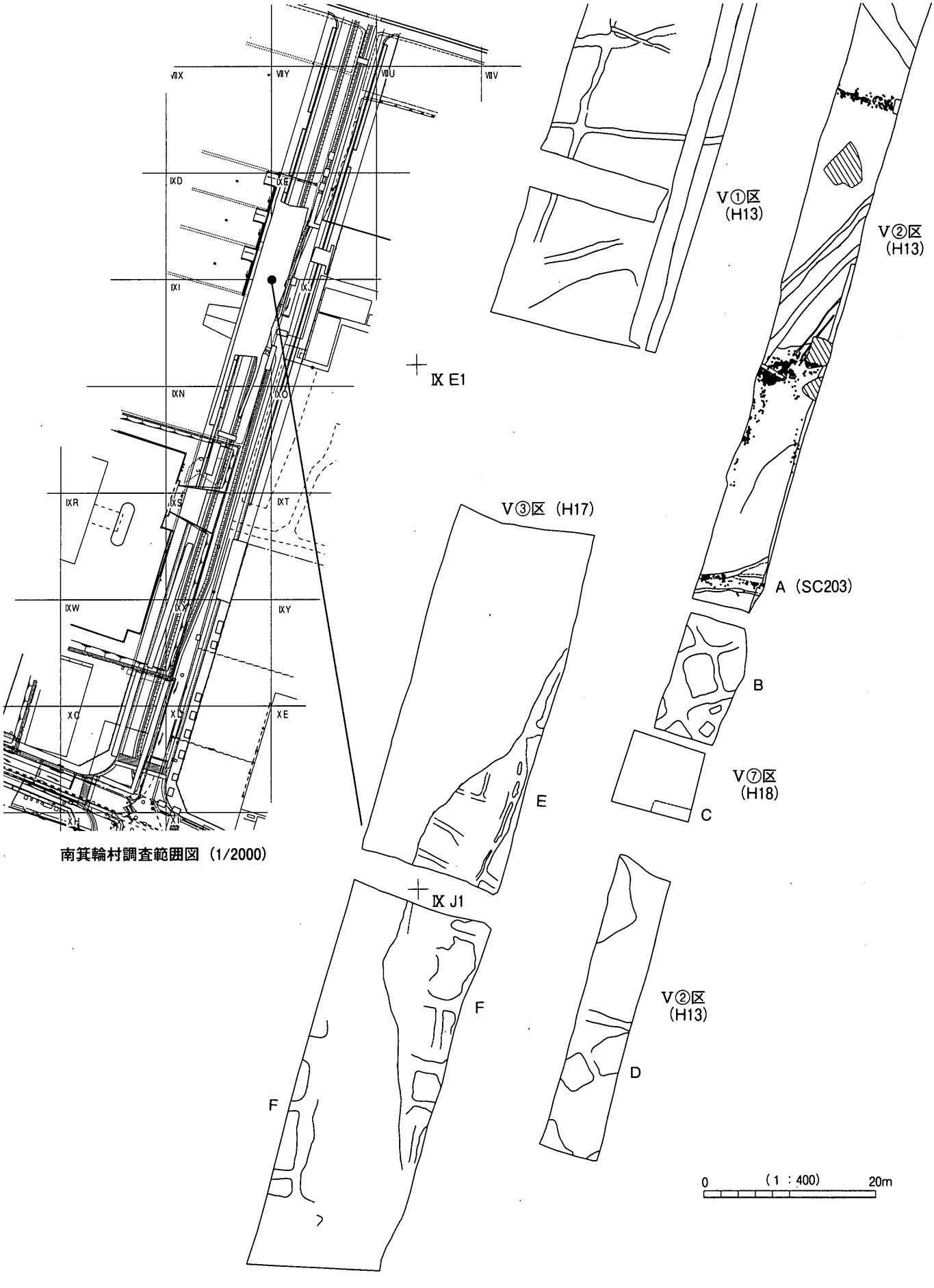
１　水田跡

（１）Ⅴ③区水田跡（第９図　PL2・３）

ア　検出過程

Ⅴ③区中央部に位置する河道状低地の凹みに堆積するⅢｂ層の最下部で検出した。このⅢ層は、粘土化する上部（Ⅲａ層）と泥炭質の下部（Ⅲｂ層）に分層された。肉眼観察では、Ⅲａ層は水田土壌化により変質したものと思われ、平成元年度調査のプラント・オパール分析（Ⅴ－②区Ｄ地点：第６図左上）で量的には少ないもののプラント・オパールが検出されていることから、水田層と理解できるものであった。また土層観察により、Ⅳ層が部分的に盛り上がる部分を確認。これを畦畔に起因するものと判断し、Ⅳ層上面で検出することとした。

調査は、Ⅲａ層上面を重機で若干削り、Ⅲａ層最下部もしくはⅢｂ層上面から手掘りを開始した。Ⅲｂ層をほとんど除去したレベルで平面精査した結果、Ⅳ層が帯状に盛り上がる部分が検出された。帯状部分は、周囲と比べて灰色粘土（Ⅳ層）の露出する割合は多いものの、Ⅲｂ層が残る部分と帯状部分の境界はぼんやりとしており、疑似畦畔と判断した。これは不整形ながら方形を意識したと考えられる（Ｆ）。疑似畦畔の規模は幅が約50～60cm（Ｆ）のものと約100cm（Ｅ）のものとの２者があった。


南箕輪村調査範囲図（1/2000）
V①区
(H13)
V②区
(H13)
Ⅸ E1
V③区（H17）
A（SC203）
B
V⑦区
(H18)
C
E
Ⅸ J1
F
F
V②区
(H13)
D
0
(1：400)
20m

第９図　Ｖ区水田跡

イ　水田土壌（耕作土の厚さ等）

河道状低地内では、Ⅲ層（Ⅲａ・ｂ層）が約20cmの層厚を測る。この層厚は、Ⅱ層に削平を受けた結果遺存したものであり、水田耕作時はもっと厚かったことに間違いはない。河道状低地外に堆積するⅢ層は、Ⅱ層もしくはⅠ層（現耕作土）に削平されたため、遺存状況は悪く約５～10cmの層厚で部分的に確認できるのみである。

ウ　大形の疑似畦畔について

２トレンチの北側では大形の疑似畦畔が検出されている（第９図Ｅ）。この疑似畦畔の中央部窪みには泥炭層が堆積し、畦畔に付設されていた水路の可能性もある（PL3）。この疑似畦畔は西側の大半を501号溝で切られているが、部分的に残る疑似畦畔西側の線からすると幅約１ｍを有しており、本来の畦畔はこれより大きかったものと考えられる。

エ　配水方向について

調査区内は、北西－南東方向に傾斜し、大形の疑似畦畔は傾斜に直交方向にのびている。このことから最も標高の高い北西部に水を集約し、配水したものと考えられる。

オ　遺物（第12図　PL8）

Ⅲｂ層より白磁片とカワラケ片が出土した。１は白磁片で口縁端部を鋭くつまみ出すＶ類（横田・森田1978）で、12世紀代と推測される（山本1995）。２はロクロ整形のカワラケ底部片で、13世紀以降と推測される。

（２）Ｖ⑦区水田跡（第９図　PL6）

ア　検出過程

Ｖ⑦区中央部の12トレンチにおいて、部分的にⅢ層とⅣ層を検出。観察の結果、本区のⅢ層はａ・ｂ層に明確に分離できないものの、Ｖ②区の所見と一致する点、土層中に植物質が若干含まれる点から水田跡と判断し、面的調査を行った。対象地の両側は平成13年に調査が行われ、Ⅳ層面で疑似畦畔が検出されており、今回の調査でも同様の遺構が存在することを想定して調査を行った。手法はＶ③区と同様にⅢ層上面から手掘りを開始、周囲のセクション観察で、Ⅳ層が部分的に高まる可能性がある部分を把握しながら精査を試みた。

イ　疑似畦畔について

調査区南端部で幅１ｍ程の東西方向にわずかに盛り上がる範囲を確認し、疑似畦畔と判断した（Ｃ）。

ウ　遺物（第12図　PL8）

３・４は、てづくねのカワラケ片で、13世紀と推測される。

２　溝跡

（１）501号溝（SD501）

ア　検出過程

Ｖ③区の北半部に位置する（第10図　PL4・6）。当該地区にはＶ②区（平成13年度調査）で検出された溝がのびている可能性が高かったため、本調査に先立ち２トレンチを設定し、溝の位置を確認し検出層位を把握することにした。その結果、Ⅲａ層を掘り込む本遺構が確認された。帰属層位と平成13年度の記録との照合からＶ②区からのびる78・81号溝の延長部と判断した。

遺構の検出は、重機でⅡ層まで剥ぎ、Ⅲａ層上面で行った。その結果、顕著に黒色化するⅢａ層のなか

に褐色を帯びたシルト層が堆積する本遺構が明瞭に確認された。なお、調査区の北側と南側は、検出面に砂礫層（ＸＩ層）が露出しており、この部分については砂礫がない部分を溝の覆土と判断した。また調査区北端では大きな攪乱のため、本遺構は壊されていた。プラン検出後、溝と直交する方向にサブトレンチを入れ、立ち上がりや覆土、底部の状況を確認し、全体の覆土掘り下げに移行した。２トレンチ南側に入れたサブトレンチで本遺構が２条に分岐する状況が確認されたため、ここで土層断面を記録した。

調査区北東隅から２トレンチ中央部を通り、調査区南東隅にのびる溝である。調査区内では曲線形状を示す。

イ　規模・形状

規模は、全長50m（平成17・18年度調査分）、検出面での上端幅２～2.5m、下端幅１～1.5m、検出面（Ⅲａ層上面）から底部までは20～30cmを測る。基本的に１条の溝であるが、最も西側に突出する２トレンチ南側（Ａ地点）で２条に分岐している。この部分で土層を観察した所、分岐した２つの溝の底部直上にはいずれも砂層が堆積し、その上部に西側の溝は黒褐色の粘土層が堆積。これを切る形で東側の溝の上部には灰黄褐色のシルト層が堆積しており、西側の溝が埋没した後に、東側に流路を変更して流れることが判明した。また分岐部分にある小島状の高まり東側の底部は西側の溝より深くなる傾向があった。本遺構の底部はほぼ平坦であるが、細かな凹凸がある。特に分岐部分のほか、502号溝と切り合う付近など部分的に深い場所がある。ここには砂礫層が堆積することから、砂礫層で削られたものと思われる。凹みの規模から、砂礫層はある程度の流速を持って押し流されたと推測される。

流路方向については検出面の傾斜や底部の高低差から、北から南方（Ⅴ②区北部→Ⅴ③区→Ⅴ②区南部）に流れていたものと思われる。

ウ　護岸施設

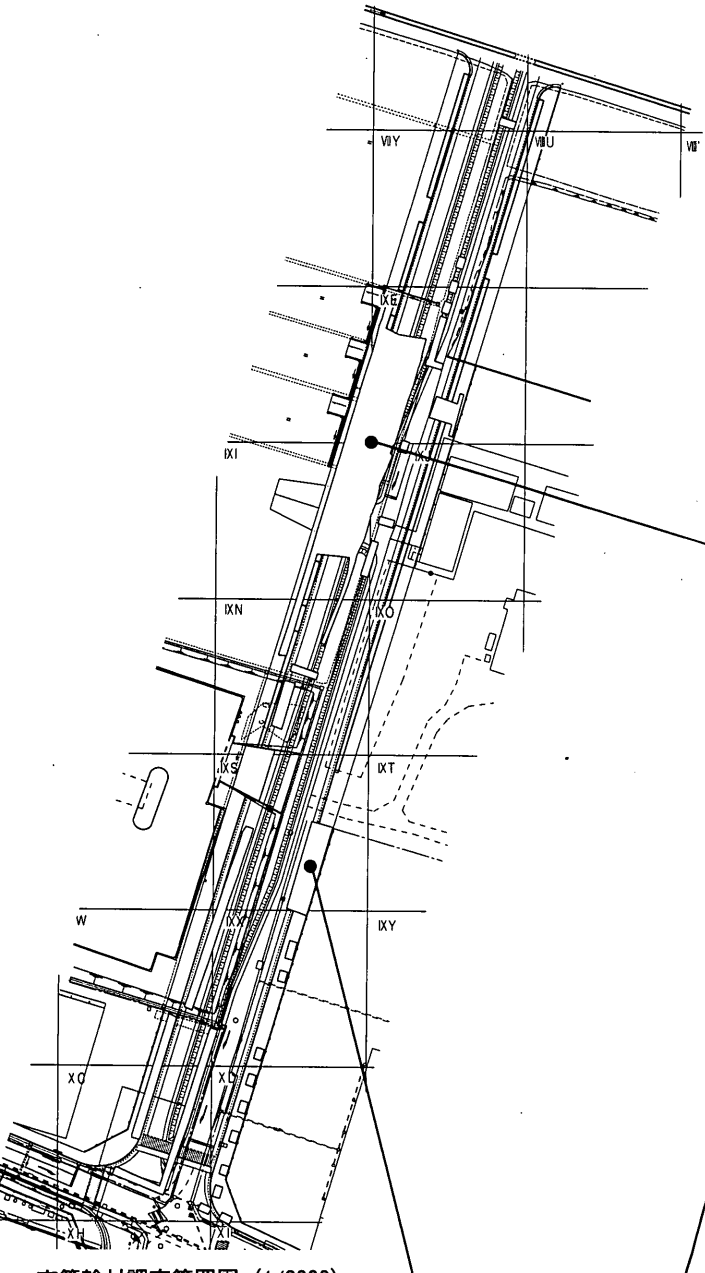
本遺構では、溝の縁辺で杭列が検出されている。同様の杭列は平成13年度調査区でも検出されており、護岸のために設置されたものと推測される。特に今回の調査区では東側の流路に沿って杭が検出されている点から、流路が東側に変更した後の杭列と判断した。まず溝の西側は、全体的に杭が溝の縁辺部に近接して並ぶ傾向がある。特に調査区南部（Ｂ地点）では杭列が30cm程の間隔で並ぶ傾向も認められた。一方溝の東側は溝の縁辺部から少し外側に並ぶ傾向があり、配列も西側に比べて不規則なものとなる。

エ　遺物（第12図　PL8）

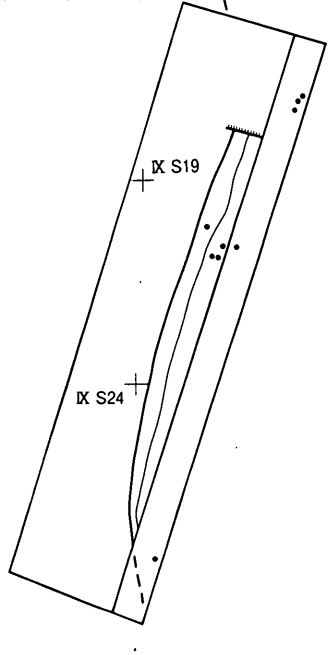
覆土中から中世～近代の焼き物の破片が少量出土した。５はロクロ整形のカワラケで、13世紀以降。６は天目茶碗の底部で、削り出し高台で、15～16世紀。７は皿で呉須の染付があり、18世紀後半～19世紀中頃。８は磁器の茶碗で、呉須の染付けがあり、幕末～明治。９は灯明皿の下皿で内面の凸帯が短く、幕末～明治。10は仏花瓶で、内面に灰釉が掛けてある、幕末～明治。11は山茶碗の捏鉢で、13世紀頃。12は擂鉢で、17世紀頃。このほか19世紀後半の紙型摺の碗（13）や「寛永通宝」（14）も１点出土した。

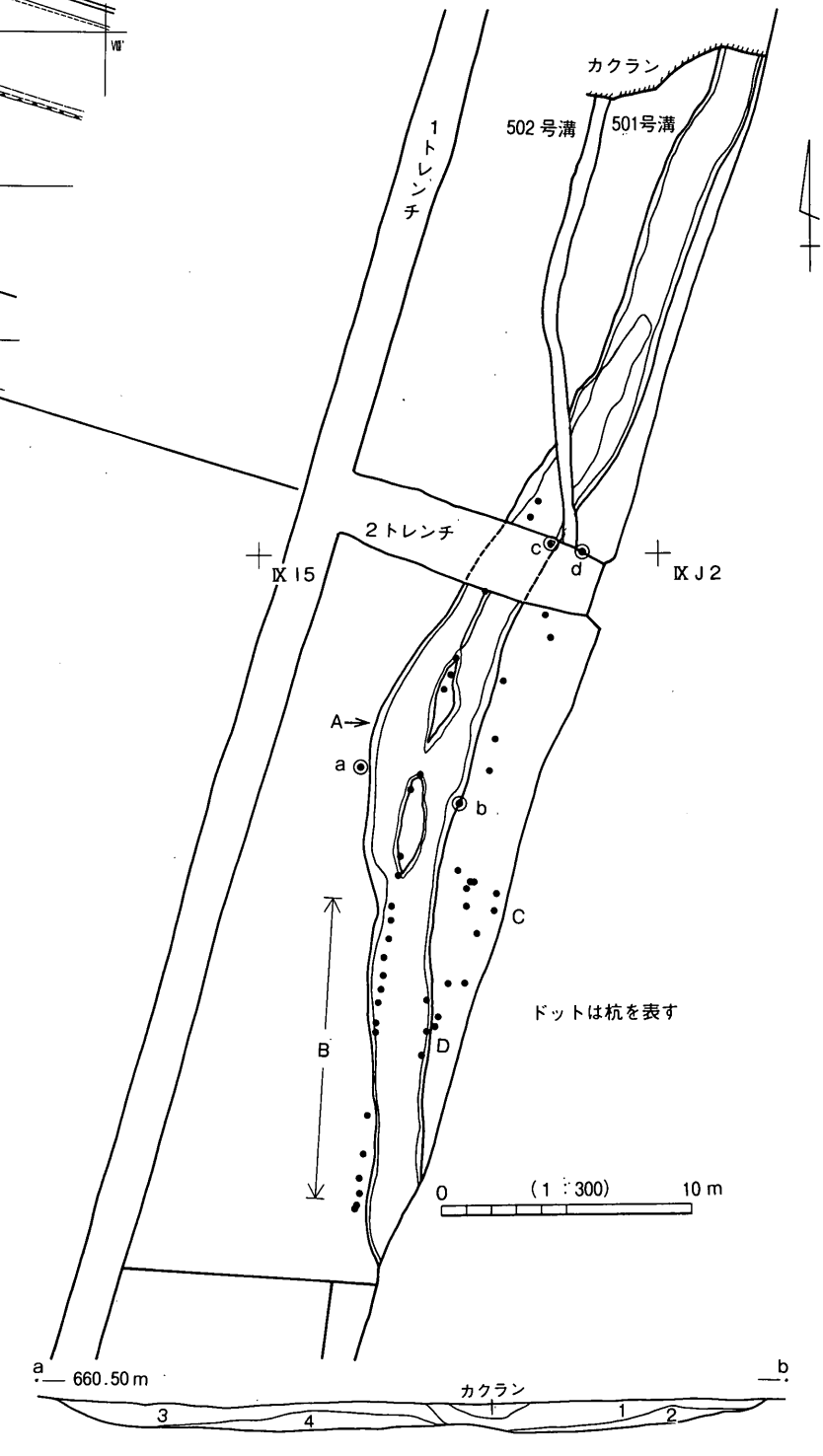
オ　所属時期

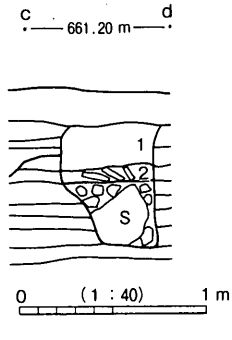
本遺構の所属時期については、出土遺物が中世～近代まで幅広く出土する点、同様の遺物が平成13年度の調査区でも出土する点から、本遺構は中世以降に構築され、近代までの一定期間存在したものと判断したい。



南箕輪村調査範囲図（1/2000）







501号溝
1 ：10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト
2 ：10YR4/1　褐灰色砂礫
3 ：10YR2/1　黒褐色粘土
4 ：10YR4/1　褐灰色砂礫
502号溝
1 ：褐灰色土
2 ：褐灰色土（木の枝を敷き詰める）

第 10 図　501 号溝・502 号溝

（2）502号溝（SD502）

ア　検出過程

Ⅴ③区に位置する（第10図　PL5）。本地区において、重機でⅡ層まで除去した所、褐灰色の覆土を有するプランを検出した。面的精査により、このプランは南北方向に直線的に伸びることが判明。溝と判断した。また2トレンチの観察により、本遺構はⅡ層面から掘り込まれることも判明した。本遺構は、一部現代の埋設土管により切られるが、501号溝を切ることが判明、他の遺構に先行して調査を行った。

イ　規模・構造

本遺構の底面は平坦で、左右両側壁部は、大きさ15cm前後の平石を貼り付けて並べ、底面からほぼ垂直に立ち上がり、その上には厚さ10cm程の平石を天井石として乗せていた。このため通水部分の断面形は平石で囲った「ロ」字状を呈する。この石列は16m程確認された。さらに、この通水施設の上部に直径5cm前後の小石を5cm前後の厚さで敷き詰め、また更にその上部には木の枝を数cmの厚さで敷き詰めている。そして最後に枝の上部に褐灰色の土を50cm程の厚さで埋めている。

ウ　出土遺物・時期

遺物は出土していない。本遺構は501号溝（近代遺物を含む）を破壊する点から近代以降の暗渠と判断したい。

（3）503号溝（SD503）

ア　検出過程

Ⅴ③区に位置する（第11図　PL5）。Ⅴ③区のⅣ層下面において、覆土に砂を有する遺構として検出した。面的精査により南北方向に伸びる溝と判断した。部分的に501号溝に切られていたため、501号溝の調査後に掘り始める。

イ　規模・構造

南北方向に直線的に延びる溝で、長さ約14mを検出した。溝の北端部は502号溝に部分的に破壊されているが、2本に分離することが判明した。南端は501号溝と交差する部分まで確認した。しかし501号溝を越えると本遺構を検出できないため、501号溝と重なる部分で流れた可能性がある。また底面全体の中央部に盛り上がり部分がある点、傾斜が北部から南部にかけて低くなる点から、2つの流路が北部で合流して1本になり、南部に流れていくことが判明した。規模は幅約5m、深さ15cm前後を測る。杭などの護岸施設がなく、自然流路の可能性がある。遺物は出土してない。

3　遺構外出土遺物（第12図　PL8）

Ⅴ③～⑦区を通して、縄文～中世の遺物が僅かに含まれるものの、近世～近代の焼き物片を中心に出土。出土層位は24以外を除き、表採もしくは検出面である。時期別の顕著な分布傾向は見られない。遺物出土量は各地区とも数袋程度である。特にⅤ④・⑤区は焼き物の小片が少量出土したのみである。

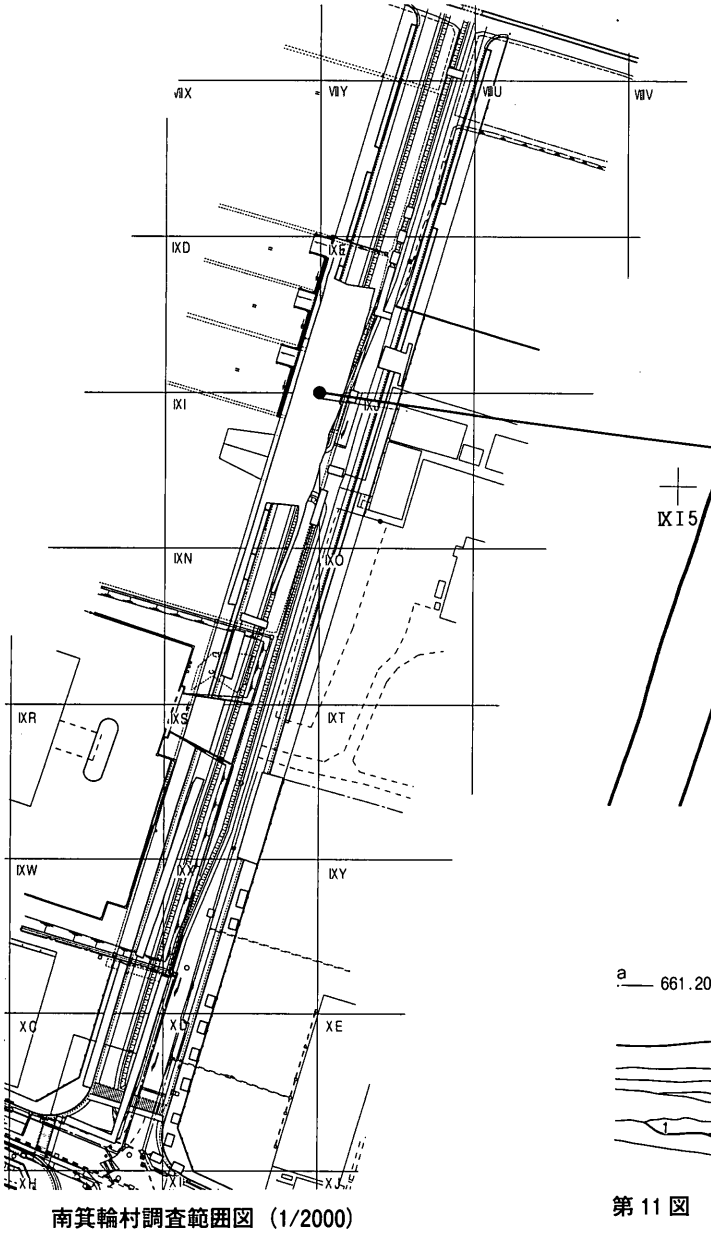
Ⅴ③区：15は弥生土器の甕胴部片で、櫛描の短斜文がある。弥生後期前半。16は須恵器の短頸壺で、奈良～平安時代。17は天目茶碗で、口縁部がS字状に外反する。16世紀。18はキセルで、吸口の肩部に段のないもので、18世紀中葉以降。19は扁平片刃石斧で黒色頁岩製。弥生中期。20は打製石斧で硬砂岩製。時期は、県埋文センターが調査したⅣ区で弥生後期の遺構から類例が出土する点から、当該期の可能性があるものの、単独出土なので断定できない。

Ⅴ⑥区：21は青磁片で、外面に連弁文がある。13世紀頃。22は捏鉢で、江戸後期～幕末頃。23は黒曜石

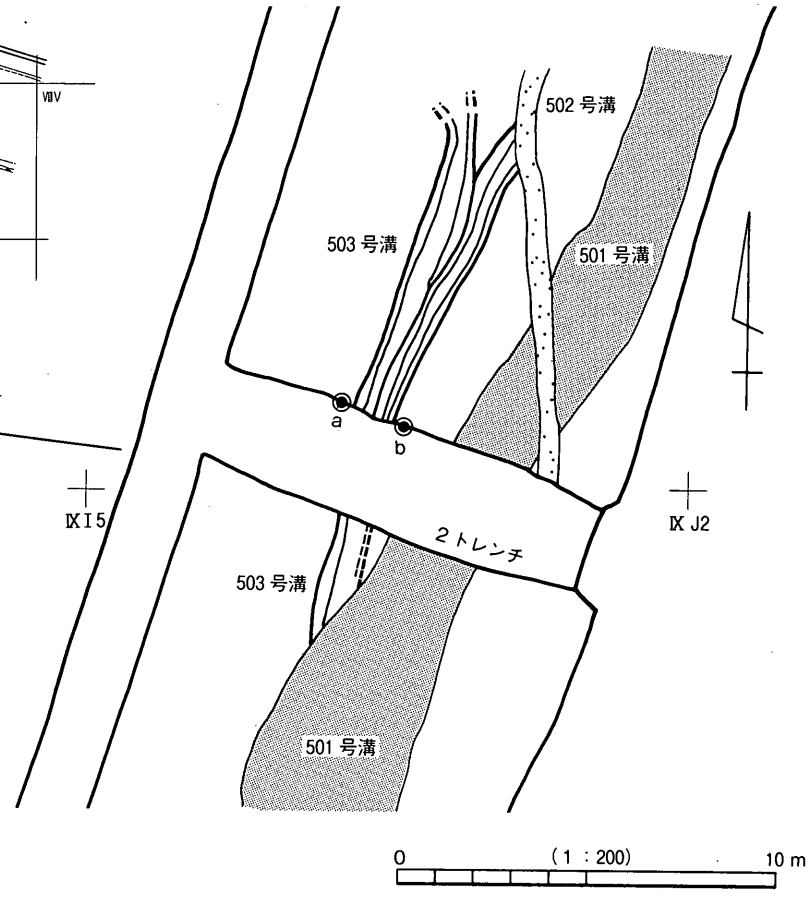
の石鏃で、側縁部を中心に調整痕が認められ、基部を欠損しているため、未成品と考えられる。時期は、埋文センターが調査したⅣ区で弥生中期の遺構から類例が出土する点から、当該期の可能性があるものの、単独出土なので断定できない。

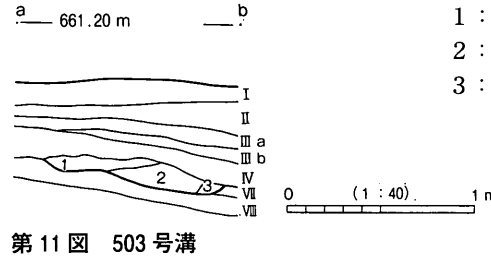
Ⅴ⑦区：24は縄文土器片で、口縁端部は波状に整形する。頸部は若干くびれ、外面に串状工具による刺突文や爪形文が認められる点から前期の所産と推測される。25は黒曜石の石核で、重さは35.9g。時期は埋文センターが調査したⅣ区で弥生中期の遺構から類例が出土する点から、当該期の可能性があるものの、単独出土なので断定できない。

上記出土遺物の中で、特に24の土器はⅣ層より出土して注目される。平成13年度の調査ではⅣ層と対応する土層から縄文前期・晩期土器が出土し、Ⅲ層からは弥生中期土器、土師器、陶磁器が出土している点から、Ⅳ層の堆積時期が縄文晩期以前ではないかと指摘されていた（センター2005）。今回Ⅳ層から24が出土したことで、Ⅳ層以下が弥生中期以前の堆積で、その後Ⅲ層（黒色土）が堆積したという、これまでの所見が補強される形となった。今後の調査で地層の形成時期がより鮮明になることを期待したい。



南箕輪村調査範囲図（1/2000）





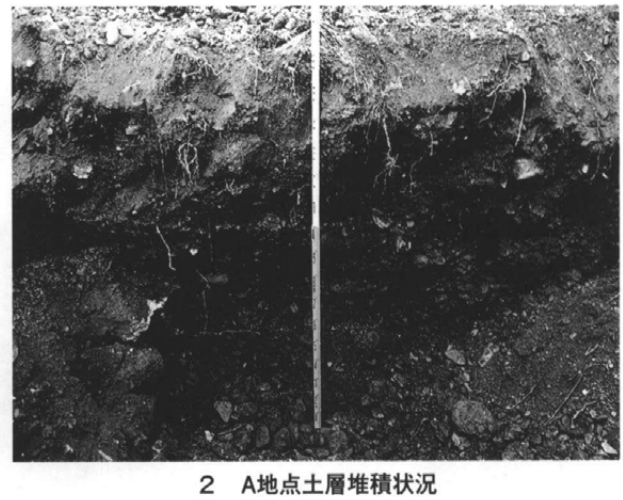
1：10YR4/1 褐灰色砂層
2：10YR3/1 黒褐色砂層
3：10YR2/1 黒色砂質シルト

第 11 図　503 号溝

第３節　村道１号線立会い調査について

平成18年６月26・29日、南箕輪村教育委員会による、Ⅴ⑥区南端部にある村道１号線の排水路敷設工事に伴い、交差点の東北角にある綿半鋼機敷地境の立会い調査が実施され、県埋文センターもこれに立ち会う形で参加した（写真１）。調査範囲は全長30m程、幅120cm程であり、工事により掘削された溝内の土層観察が行われた。しかし地表下80cmには水道管が敷設されていたため、大部分は客土の堆積しか観察できなかった。唯一、Ａ地点（第６図右上部）において深堀が可能であったため、実施した所、地表下1mで礫層を検出した（写真２）。部分的な調査なので付近の堆積状況について触れることはできないが、センター調査範囲より東側（天竜川寄り）において、礫層が高い部分で検出された点と、本礫層がセンター調査区のＸＩ層に対応するかは断定できない点を報告する。

１　村道１号線立ち合い調査状況



２　Ａ地点土層堆積状況

参考・引用文献

市川隆之　2004　「箕輪遺跡の伊那バイパス・松島バイパス関連の発掘調査から」
『箕輪遺跡　第14・15次緊急発掘調査報告書』箕輪町教育委員会

江戸遺跡研究会　2001『図説　江戸考古学研究事典』

瀬戸市埋蔵文化財センター　2002　『江戸時代の瀬戸窯』

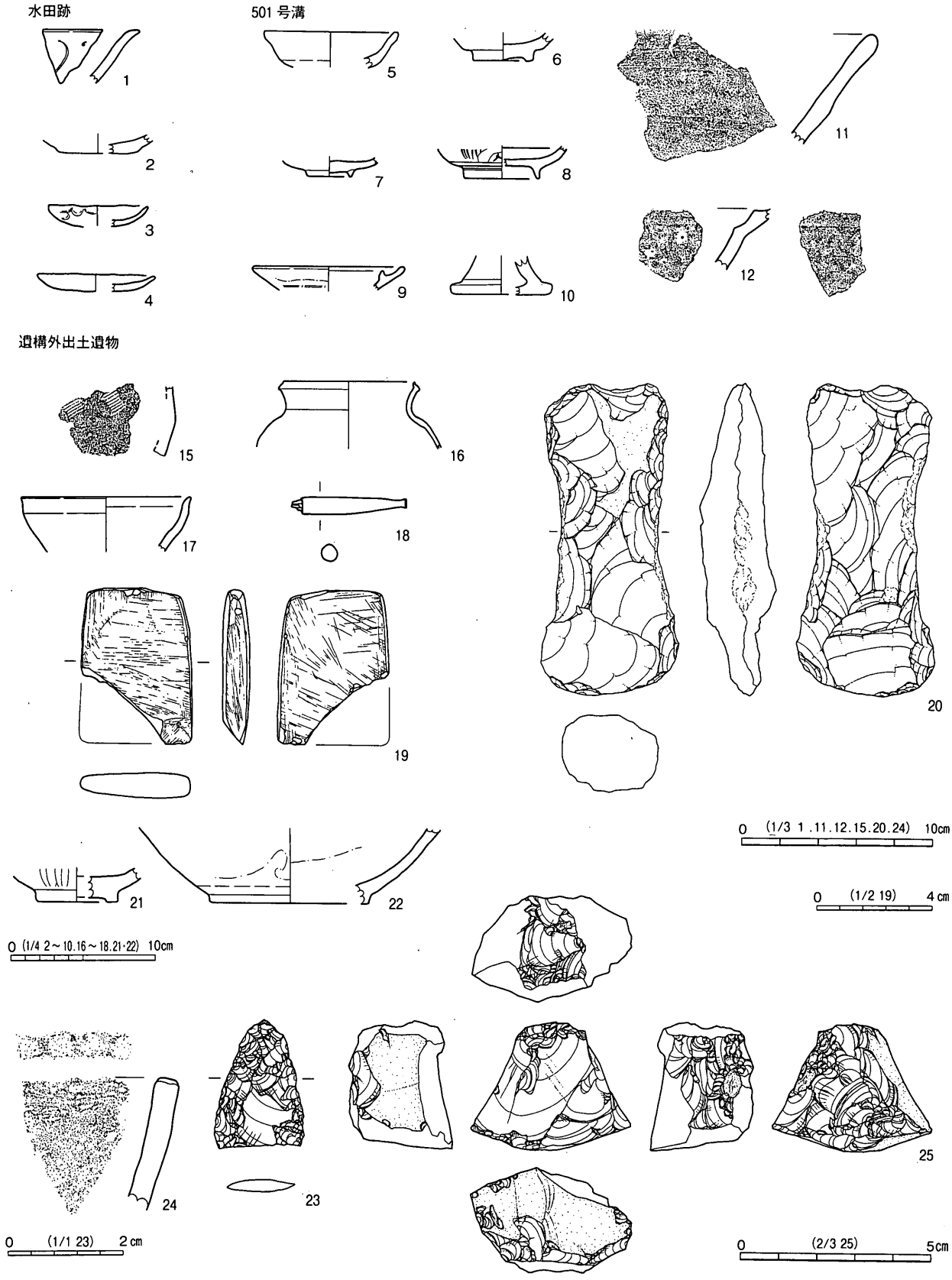
長野県埋蔵文化財センター　2005　『箕輪遺跡』

藤沢良祐　2002　「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』10　瀬戸市埋蔵文化財センター

山下峰司　1995　「灰釉陶器・山茶碗」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

横田賢次郎・森田勉　1978　「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館論集四』

東日本の水田跡を考える会　1998　「第８回　東日本の水田跡を考える会　資料集」



V③区 15～20　V⑥区 21～23　V⑦区 24～25

第12図　V③・⑥・⑦区出土遺物

第Ⅳ章　まとめ

今回は南箕輪村部分についての調査であり、隣接する調査区は箕輪町分として平成17年に報告しているので、ここでは遺跡南部（Ⅴ区）を中心とした様相を、いままでの成果と合わせながらまとめとしたい。

溝跡について

溝跡は３条検出した。いずれも流路であったことが確認された。特に501号溝（第６・10図）はⅤ②区（H13調査のSD78・81）、③区、⑥⑦区で調査が行われ、180mに渡り検出された。幅約3m、深さ約30cmを測る。流路は河道状低地の縁辺部付近に沿って流れており、地形からみて北部→南部に蛇行しながら流れることが判明した。また一部に杭列が残存し、護岸施設をもった水路と理解できる。遺物は中世～明治までの焼き物を中心に少量出土している。特に江戸後期の陶器・陶磁器が一定量含まれており、本遺構の流水時期の一端を示すと判断できる。

水田域の広がりについて

箕輪遺跡全体の地形については、過年度の調査で比較的南部に河道状低地が連続することが判明しているが（第４図）、今回の調査でも地区を縦断する河道状低地が何本も検出され、特に規模が大きく、比較的深い河道状低地の凹みでは部分的に水田跡を検出した。平成12～15度の調査により「河道跡低地を中心に古墳時代には水田化されていたが、河道跡が埋没するにしたがって、微細な凹凸地形の高低差が減少し、水田域が広がること」が判明しており（市川2004）、従来の成果を補強する結果となった。

一方で、Ⅲ層は遺跡全体に広がることが判明しており（第４図）、幾つかの地点でプラント・オパール分析が行われている。これによると当センター調査区における基本Ⅲ層からは稲が検出されているが、南箕輪村調査のナガレ地区（第５図６・７地点）ではⅢ層からプラント・オパールが検出されないなど、Ⅲ層全てが水田化されるのではなく、湿地帯の一部が水田化されている可能性を示唆しており、興味深い。

水田跡の区画と耕作時期について

Ⅴ③区では北より15°程東に振れた方向にのびる大形の疑似畦畔（第９図Ｅ）を検出した。幅は1m程で、畔の上部で溝状の窪みがあり、畦畔の中央部に水路が付設された可能性もある。またこの疑似畦畔にほぼ軸を合わせたような疑似畦畔も検出されており、今回の調査区には方形を意識した水田区画が存在したかもしれない。しかしⅤ②区では、上記の区画に斜行するＢ・Ｄも検出されている。このように近接地区で異なる方位の疑似畦畔が検出された点について、平成12～15年度の調査では「耕作土下面に転写された痕跡を検出したとすれば、かつて存在した畦畔すべてが残されたとは言えず、複数時期の水田区画を検出している疑いがある」としている（県埋文センター2005）。

耕作時期についても、Ⅴ③・⑦区のⅢ層水田跡で白磁片（12世紀代）とカワラケ片（13世紀以降）が出土したものの、両者には時期差が存在する。また遺跡全体のⅢ層出土遺物をみても「弥生後期・古墳後期・平安・中近世の陶磁器が出土し、このなかでもっとも出土量の多いものが中近世陶磁器」と幅広い時期差が存在しており（市川2004）、当地区の遺物だけで耕作時期を確定することはできない。

上記の点から考え、本水田跡の耕作時期は中世以降の複数期に渡る可能性があり、特定の時期の水田区画を抽出することが困難な状況にあることを報告したい。

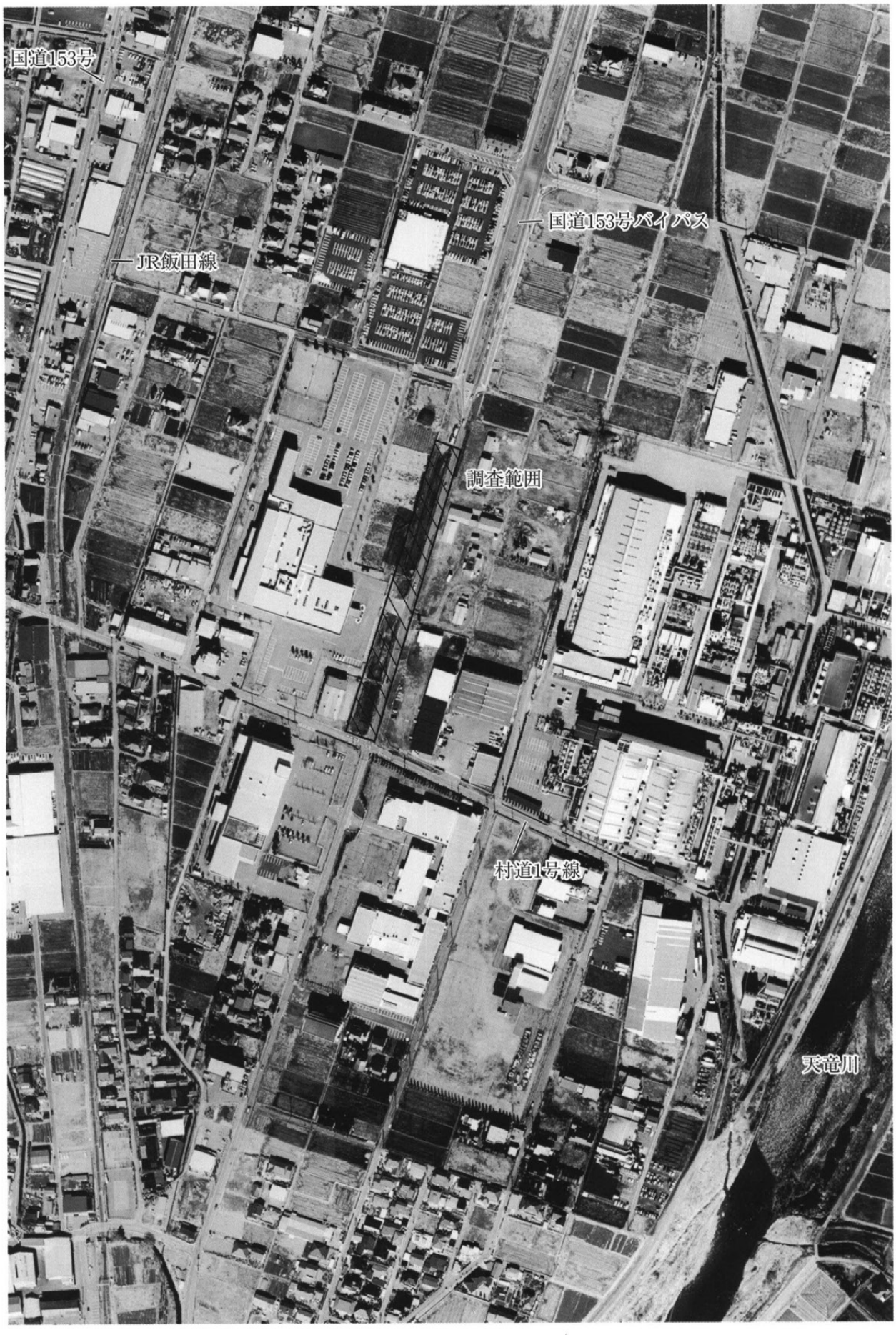
箕輪遺跡の南限について

箕輪遺跡の南限については、南箕輪村と箕輪町の境付近で行われた調査の結果から、部分的に水田跡と水路は検出されているものの全体的に遺構数が少なく、土層の堆積状況からも河道状低地が多くなる地形の変換点であることが判明しており、今回の調査区周辺が遺跡の南限である可能性が高くなってきた。

本遺跡の分布範囲は広大であり、伊那バイパス関連の調査においても狭い範囲を直線的に調査したに過ぎない。また道路周辺における調査も限定的であり、遺跡全体の様相が解明されたわけではない。今後も調査成果を蓄積し、集落や水田域の広がりを一層明らかにしてゆく必要がある。

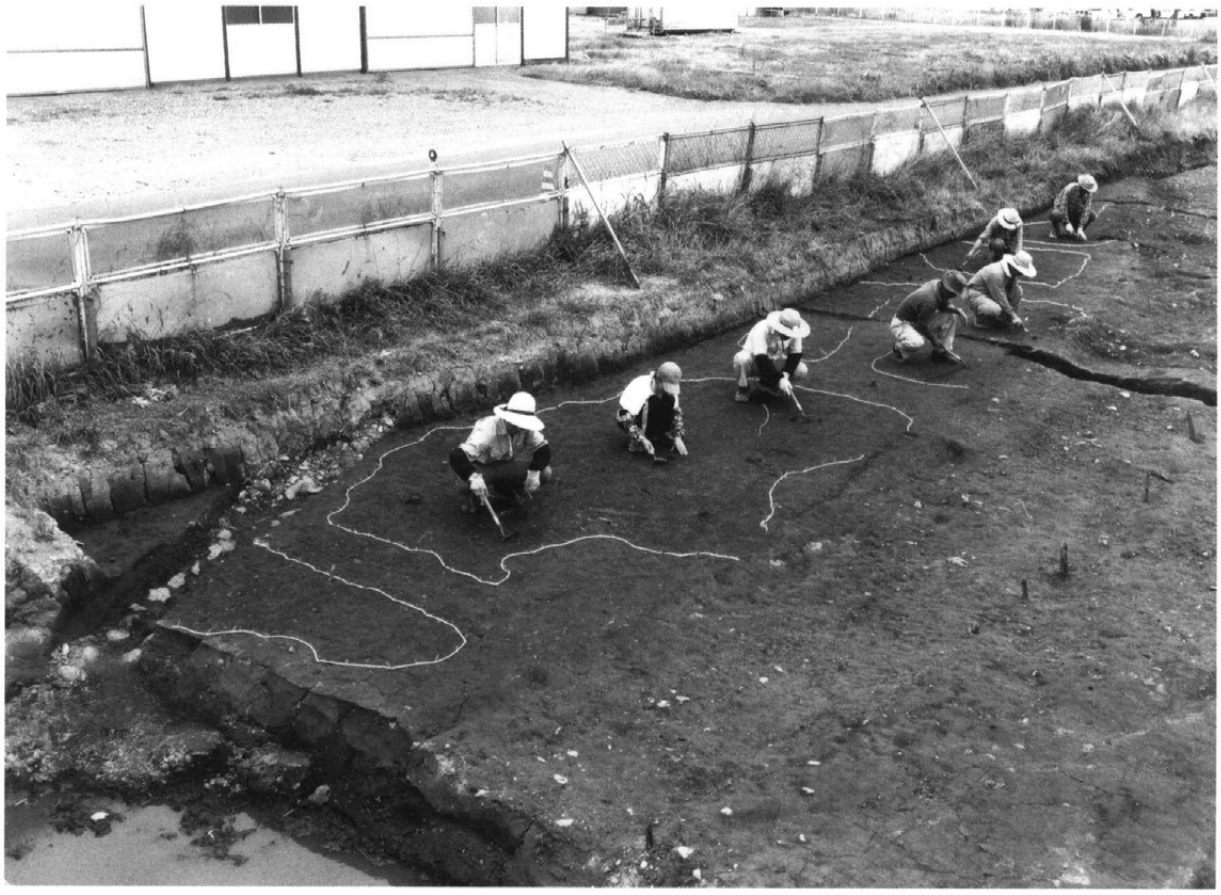
平成18年７月、本報告書の作成中に、集中豪雨により箕輪町で天竜川が決壊し、大きな被害が出た。南箕輪村には昭和26年に北殿付近で天竜川が決壊した写真が存在する（PL7)。更に江戸時代には天竜川が２つに分かれている絵図も描かれている（PL7)。本遺跡は天竜川の氾濫源にある。付近は洪水の危険性はあるものの、水田耕作には適したところであり、人々がこの環境を生かしながら耕作域を拡大し、現在に至ったことを改めて感じることができた。

最後になりましたが、発掘調査にご理解、ご協力をいただいた、関係者の皆様、発掘・整理体制を維持し、ご指導いただいた関係諸機関の皆様に対して深く感謝したいと思います。

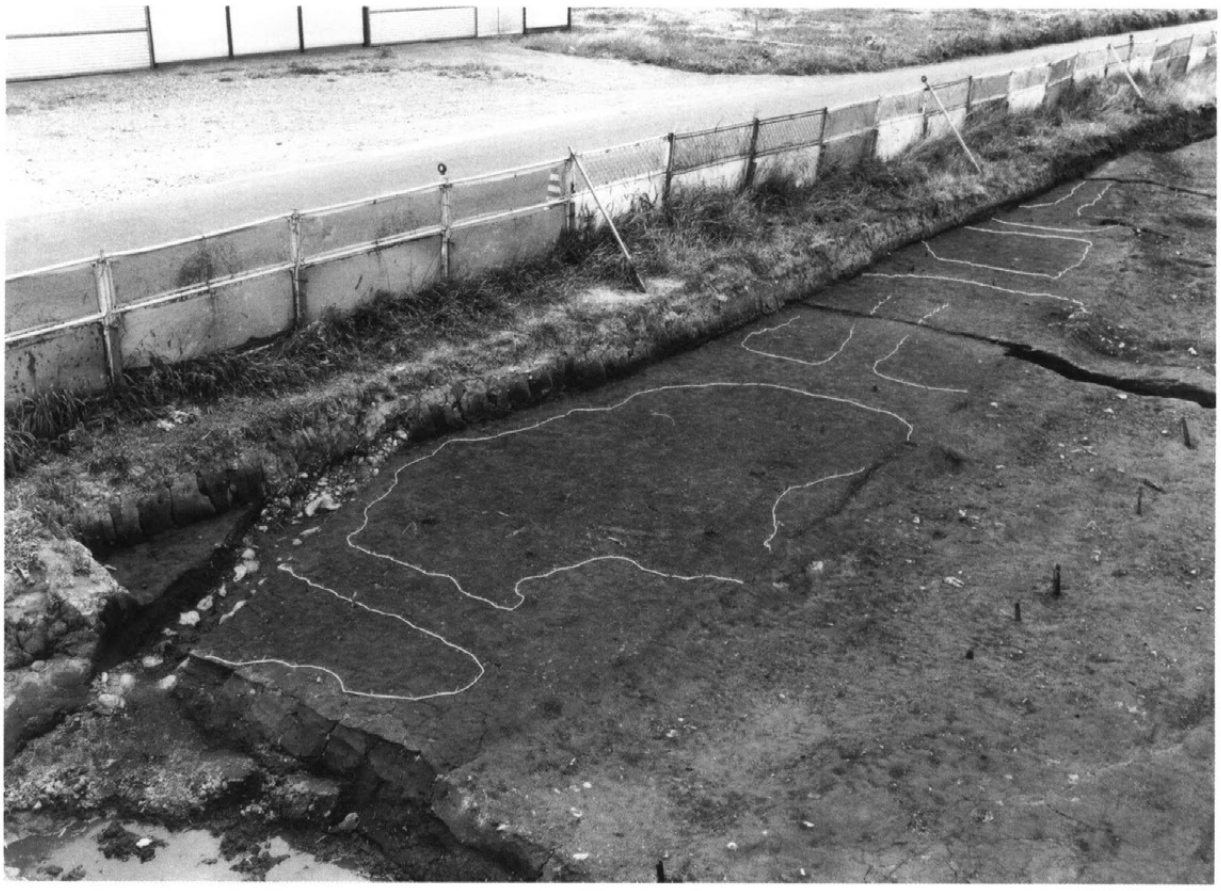


箕輪遺跡　平成17・18年度調査範囲（中央トーン部分）

PL 2　Ⅴ③区遺構1



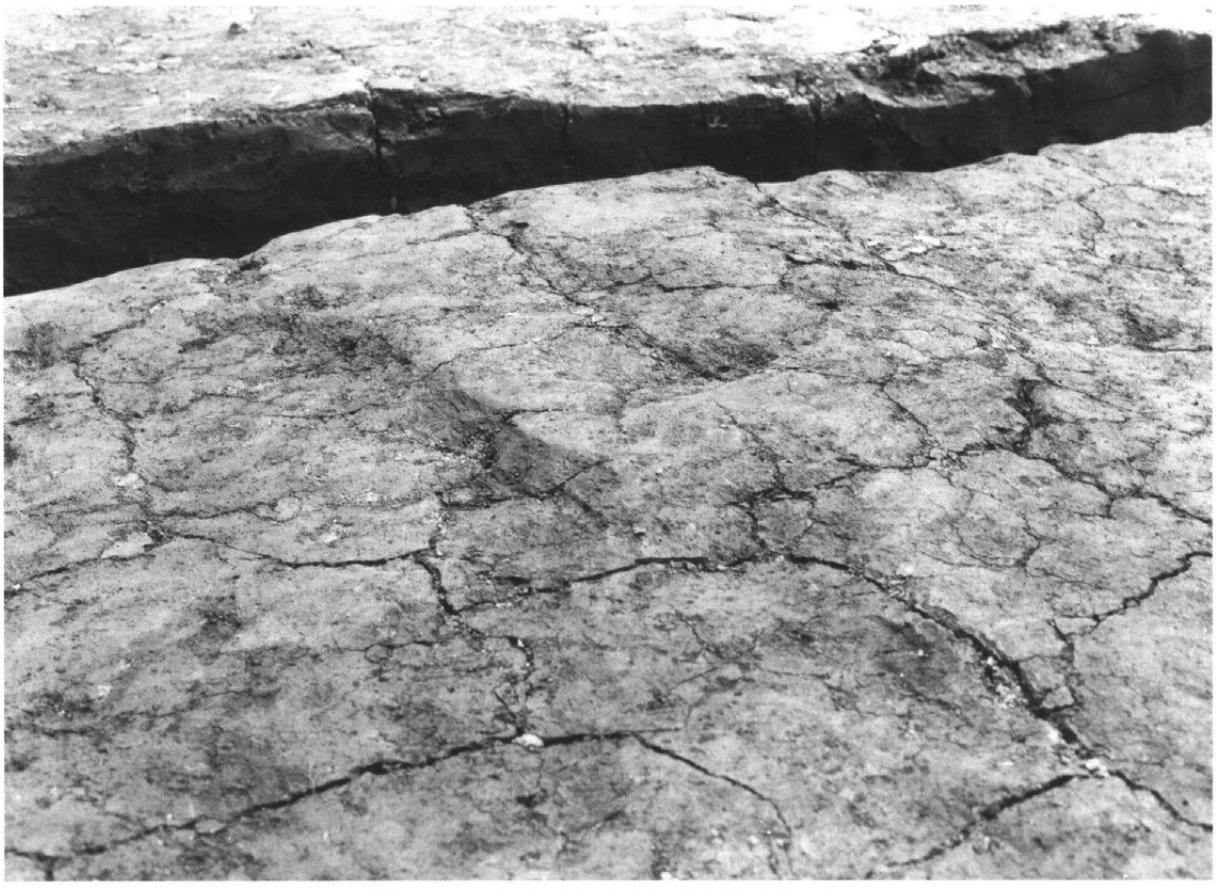
Ⅴ③区水田跡（南部の疑似畦畔検出作業）



Ⅴ③区水田跡（南部の疑似畦畔）

Ⅴ③区水田跡（南端より）

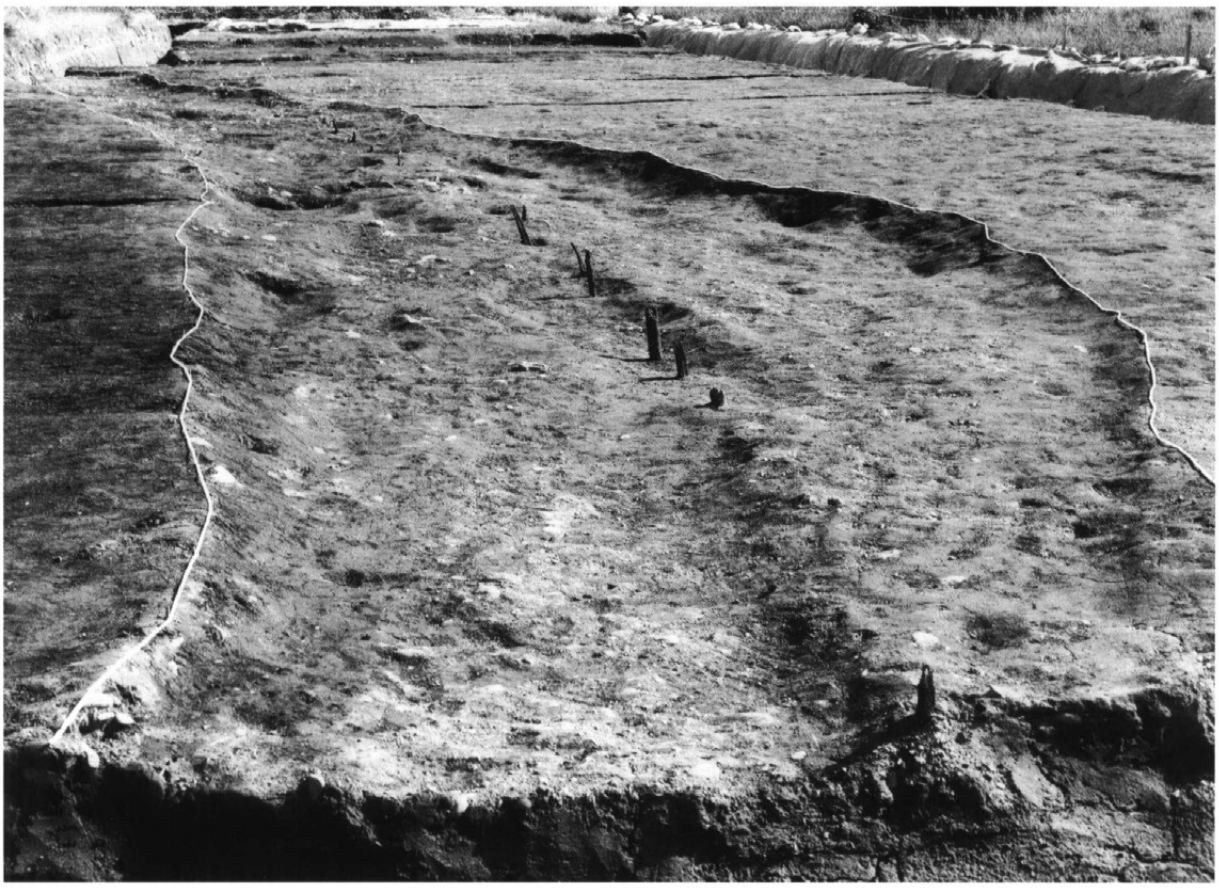
Ⅴ③区水田跡（北部の大形疑似畦畔検出状況）



Ⅴ③区水田跡（Ⅳ層面疑似畦畔検出状況）

PL 4　Ⅴ③区遺構３

Ⅴ③区501号溝（南端より）



Ⅴ③区501号溝（杭出土状況）

Ⅴ③区502号溝

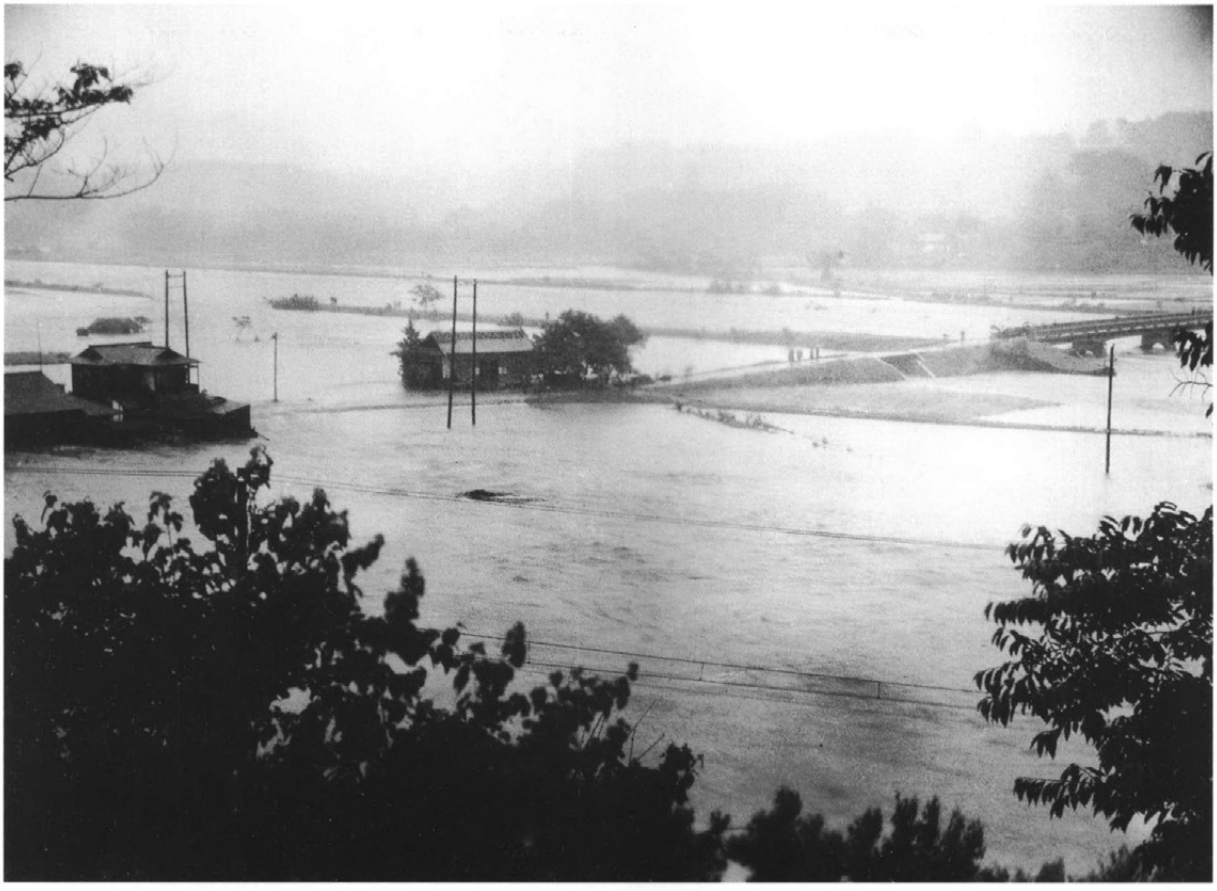
Ⅴ③区503号溝

Ⅴ③区２トレンチ土層堆積状況

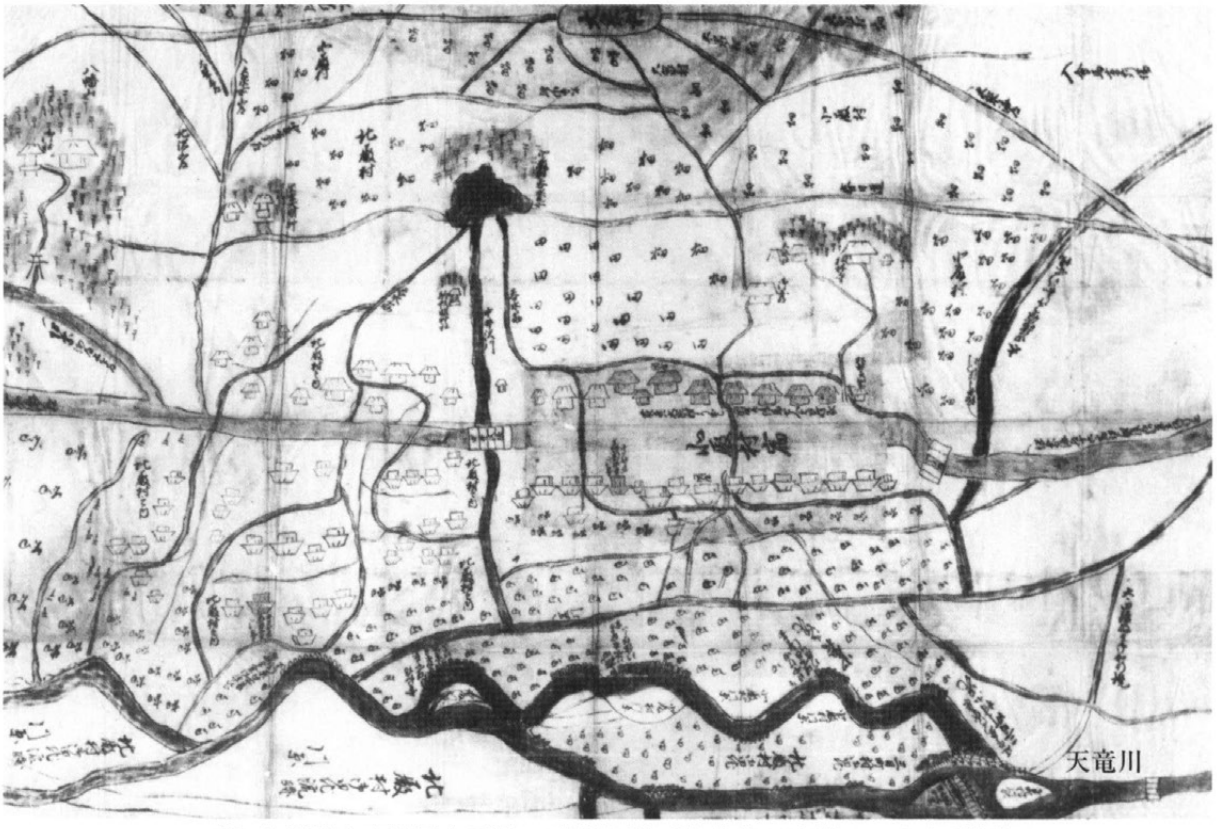
PL 6　V⑥・⑦区遺構

V⑥区501号溝

V⑦区水田跡



天竜川の氾濫　北殿天竜橋付近　昭和26年（南箕輪村教育委員会より提供）



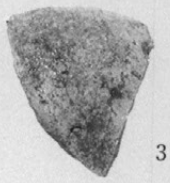
「大泉北殿合宿絵図」正徳～享保年間（南箕輪の史跡 S.54から引用）

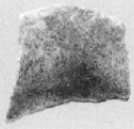
PL 8　Ⅴ③・⑥・⑦区遺物写真

水田跡１・２

1

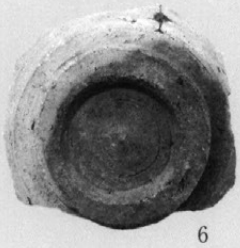
2

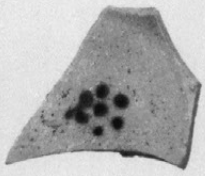

3


4

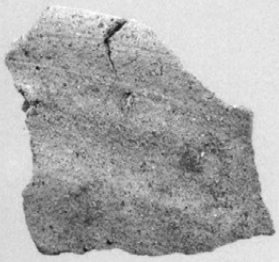
501号溝

5


6

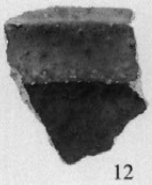

7

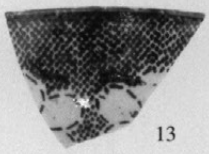
8


11

9

10


12


13

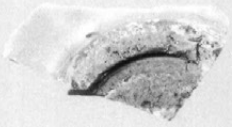
遺構外出土遺物

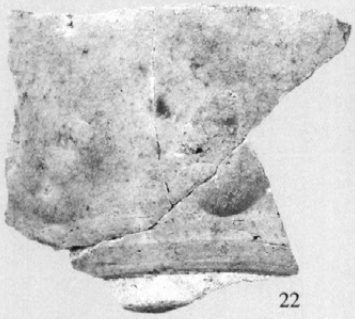
15

16

17

14


21


22

24

18

20

19

23

25

Ⅴ③区14～20　Ⅴ⑥区21・22・23　Ⅴ⑦区24・25

箕輪遺跡関連文献

1954　藤沢宗平　他　　「箕輪遺跡中間報告集」『箕輪遺跡　調査第Ⅰ集』に収録
1954　箕輪史研究会　　『箕輪遺跡報告』箕輪史研究資料第２集
1954　箕輪史研究会　　『箕輪遺跡中間報告』箕輪史研究資料第３集
1954　藤沢宗平　　「箕輪遺跡にみる農業と文化」『農業信州』
1955　藤沢宗平　　「長野県上伊那郡箕輪遺跡について」『信濃』7-2
1958　小池修兵　　「箕輪遺跡第３回の報告にかえて」『伊那路』2-5
1964　大場盤雄　　「上伊那郡箕輪町発見の祭祀遺物」『伊那路』8-1
1965　上伊那郡誌刊行会　『長野県上伊那誌　歴史編』
1980　箕輪町教育委員会　『箕輪遺跡　調査第Ⅰ集』
1981　箕輪町教育委員会　『箕輪遺跡　調査第Ⅱ集』
1982　柴　登巳夫　　「箕輪遺跡出土の人形」『伊那路』26-3
1983　箕輪町教育委員会　『箕輪遺跡　調査第Ⅲ集』
1983　箕輪町教育委員会　『箕輪遺跡　調査第Ⅳ集』
1983　柴　登巳夫　　「箕輪遺跡」『長野県史　考古資料編　主要遺跡（中・南信）』長野県史刊行会
1984　日戸武彦・倉田友雄「第８章　箕輪遺跡」『南箕輪村誌』　南箕輪村誌編纂委員会
1985　柴　登巳夫　　「弥生時代の箕輪」『伊那路』27-6
1986　柴　登巳夫　　「第一編　第２章１　箕輪遺跡」『箕輪町誌　歴史編』
　　箕輪村誌編纂刊行委員会
1991　箕輪町教育委員会　『箕輪遺跡　第５次緊急発掘調査報告書』
1991　箕輪町教育委員会　『箕輪遺跡　第６次緊急発掘調査報告書』
1991　箕輪町教育委員会　『箕輪遺跡　第７次緊急発掘調査報告書』
1993　南箕輪村教育委員会『箕輪遺跡　塩ノ井中田地区』
1994　南箕輪村教育委員会『箕輪遺跡　久保天下方地区』
1994　箕輪町教育委員会　『箕輪遺跡　第８次緊急発掘調査報告書』
1997　箕輪町教育委員会　『箕輪遺跡　第10次緊急発掘調査報告書』
1997　箕輪町教育委員会　『箕輪町遺跡詳細分布調査報告書』
1999　南箕輪村教育委員会『南箕輪村遺跡一覧表』
2003　桜井松夫　　「中世　市のうつりかわり」『信濃』55-7
2004　箕輪町教育委員会　『箕輪遺跡　第14・15次緊急発掘調査報告書』
2004　市川隆之　　「箕輪遺跡の伊那バイパス・松島バイパス関連の発掘調査から」
　　『箕輪遺跡　第14・15次緊急発掘調査報告書』に収録
2005　長野県埋蔵文化財センター『箕輪遺跡―箕輪町内―』
2007　長野県埋蔵文化財センター『箕輪遺跡―南箕輪村内―』

報告書抄録

ふりがな	こくどう153ごう　いな・まつしまバイパスけんせつ まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ２　みなみみのわそんない
書名	国道153号　伊那・松島バイパス建設　埋蔵文化財　発掘調査報告書２　南箕輪村内
副書名	箕輪遺跡
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	81
編著者名	廣田和穂
編集機関	（財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388－8007　長野市篠ノ井布施高田963－4　Tel　026－293－5926
発行年月日	2007年（平成19年）２月28日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
箕輪遺跡（みのわいせき）	長野県（ながのけん） 上伊那郡（かみいなぐん） 南箕輪村（みなみみのわむら） 字中田（あざなかだ） 3888-1他	20385	30	35度 52分 59秒 旧測地	137度 59分 24秒 旧測地	2005.4.25 ～7.8 2006.6.12 ～6.23	6200㎡	国道153号伊那・松島バイパス建設に伴う事前調査

所収遺跡名	立地	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
箕輪遺跡	天竜川右岸の氾濫源	水田跡 溝跡	中世以降 近世～近代	疑似畦畔 溝跡３条	縄文時代：打製石斧 弥生時代中期：扁平片刃石斧 弥生時代後期：土器 古代～中世：山茶碗・白磁・カワラケ 近世～近代：陶器・陶磁器片・寛永通寶	中世以降の疑似畦畔を検出

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書81

国道153号　伊那・松島バイパス
埋蔵文化財発掘調査報告書２

―南箕輪村内―

箕輪遺跡

発　行　平成19年（2007）２月28日

発行者　長野県伊那建設事務所
（財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388－8007　長野市篠ノ井布施高田963－4
TEL　026-293-5926
FAX　026-293-8157
E-mail　maibun@grn.janis.or.jp

印　刷　信毎書籍印刷株式会社
〒381-0073　長野市西和田470
TEL 026-243-2105　FAX 026-243-3444